
Sternklare Nacht

唐沢 八江太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sternkla re Nacht

【Zコード】

Z5887I

【作者名】

唐沢 八江太

【あらすじ】

人を喰う精霊が棲む そういうわれ続けてきたモンデンヴァルトの森に、一人の少女が迷い込む。倒れていた少女を見つけたのは、当の人喰いといわれる精霊・エルフエの青年だつた。精霊の歌を操る彼は、少女を殺さず自分達の集落へ連れて戻るが……

ヒトとエルフエ、魔法と歌、そして復讐と罪の記憶。
エルフエの歌うたいと人間の少女が紡ぐ、とある冬の物語。

序 N a c h t (夜)

「綺麗な夜だな」

金の瞳を星月夜にきらめかせて、男は咳く。傍らの少女も同じよう
に空を見上げ、まだ少し欠けている歯を口に映した。ほんの僅か
な沈黙を破り、少女は白い息と共に、かすかな声で咳く。

「あたし、じうこつ星が煙るような田に産まれたんだって

「ああ、それでか……名前」

何かに納得して、青年は口元をゆるませた。少女はそんな彼に視
線をうつし、灰色の毛皮を直しながら尋ねる。

「ねえ、あたしの名前、なんて意味なの？」

「うん？ ああ……精霊時代の古い言葉でな

一人の間を、風が吹き抜けた。

第一節 Monden Play (モンテンヴァルト) (前書き)

モンテンヴァルトにや 踏み入るな

子供なんかが入つたら

おなかを空かせた妖精に

たちまち喰われてしまうのね

ほーほーほーい、ほーいほー

『ラウブ村のわらべ歌』より

第一節 Mondenwald (モンテンヴァルト)

しんしんと、雪がふっていた。

音もなく天より舞い落ちる白の華は、地面に降り立つとのまま静かに積もつてゆく。

そんな雪の夕方、妖精が棲むと噂される森の中を、一人で歩く者がいた。毛皮の服と帽子を身に着け、背中には弓と矢筒を背負っている。うす汚れたマフラーで鼻先までを覆い、時折立ち止まって辺りを見回す瞳は琥珀色、というよりも金色に近い。

灰がかつた白と濃い影の色以外には、ほとんど何も見えなかつた。この森は、冬になると生き物の気配がなくなる。真冬にここを歩くのは、エルフエと呼ばれる精霊たちの見回りくらいだった。もさり、もさり、といづ、ぐぐもつた足音だけが、マフラーを手繰り寄せた耳元へ届く。

冷たい風に晒された皮膚の感覚は、すでに凍りついていた。精霊とはいがもの、体の感覚は人間と大差ない。時々握つたり開いたりしながら、手が動かなくなないように気を配り、歩き続ける。毛皮で出来た厚いブーツの中身も、かじかんで段々痛みだしていた。冬の見回りには、腰のナイフと背負つた弓と、鍛えた感覚だけが頼りだ。

とはいえ、この深い雪の中に現れる者など、そがあらう筈もなかつた。いつもどおり、という油断から、それの存在に気付くのが遅れた。

「おあッ?!」

何かに足を引っ掛け、バランスを保てずに雪の中に突っ込む。長年の経験で染み付いた習性から、かろうじて頭から飛び込むような醜態は晒さずに済んだものの、顔の半分が冷たい雪にまみれた。

「……？」

頭をふって起き上がり、足下に横たわっていたそれに視線を移す。引っ掛けた感触がなんだか柔らかかったが、と不思議に思ったそれは、茶を帯びた灰色の毛皮に覆われていた。

最初は、餌を求めて迷い出た鹿か何かの死体にみえた。昨日の見回りではそんなものは見かけなかつたので、思いがけず新鮮な肉にありつけるか、などと考えたところで、間違いに気付いた。帽子を直しながら、体温で溶けた雪に濡れた髪をかきあげて、男は溜め息をつく。

半ば雪に埋もれたそれは、毛皮を纏つた人の形をしていた。しゃがんで覗き込めば、まだ少女といつていいい顔立ちだ。それも、エルフではなく人間の。その顔と耳の形を見て、男は一瞬、息を飲む。

……もう死んでいるのか？

人と分かつて慌てて掘り出し、振り動かしてみたがピクリとも動かない。

触れた頬は土気色、まるで体温を感じなかつた。紫色の唇になかば諦めかけながら、男は遭難者の細い首筋に手袋を外した指を押し当て、脈を測る。指先に、今にも途切れそうなほど弱々しい鼓動を感じた。

……生きている。

だが彼のすむ集落までは、まだ大分距離があった。何もしなければ、こんな少女の命などすぐに尽きてしまうだろう。

青年は首筋から手を放すと、彼女の体を再び雪上にそっと横たえ、立ち上がる。凍るほど冷たい空気をゆっくりと胸一杯に吸い込み、低いが澄んだ声で歌い出した。

透き通る風に踊れし凍てつく氣ムカシよ

大地にある母が御胸にしばしまどろみ

遙けき空に住まういと高き父アツキタチよ

今ひと度我は願い、光望む

雲に隠れた慈悲の雨、大地に眠る命の火よ

我が祈りに耳かたむけよ　彼の子チらの命の糸を
その御手による妙なる衣アモリの
織り糸にしばし留め賜え

紡がれる音に誘われるようにして、樹々の枝から小さな光の粒が集まり、意識のない彼女の周りをぼんやりと照らしだす。やがてそれらの光は、少女の胸のあたりからゅつくりとその体へ染み込んでいった。

青年は歌い終わると、再び少女の傍らに膝をつき、あらためて頬に触れてみる。皮膚は未だに冷たかったが、青ざめていたそこにわずかな赤みがさはじめていた。

「ひとまずは大丈夫だな……後は、と」

ひとり「ひて安堵の息を吐き、男は弓と矢立てを腰のあたりにつけ直す。それから少女の体を起こし、自分の背に負つた。人間にしては軽いが意識のない体は、ぐつたりとして重く感じる。

しばらく森の中を北東へと進み、やがて樹々が少しずつまばらになつてくると、青年のすむ集落は近い。遭難者を拾つてからここまでは特に何も無く、ほぼ普段どおりだった。もう少しだ、と少女を背負い直し、足を早める。

安心しかけたその頬を、背後から矢がかすめた。思わず矢の飛んできた方へ目をやると、今度は怒号が飛んでくる。

「何者だ？！」

「ガイゲ？……あの馬鹿つ

馴染みの名前を呟き、振り返つて怒鳴りかえす。

「シユネイだ、ガイゲ！　いま森の見回りから帰つた！」

「いやいやいや、んなのさすがのガイゲも分かつてんだろ。その背中に聞いてんだ」

「……ブランド」

同じような毛皮の服を着た、年恰好はシユネイと同じくらいの男が近付いてくる。シユネイよりはやや細身で、耳の先が尖っていることから、彼も同じくエルフエだと知れる。

「……答えられる状態じゃない。見つけたときは半分死体だつたけ

ど、まだ生きてたから、軽く蘇生して連れてきた

「ふーん……つておいおい、これ人間じゃねえかよ？ つたぐ、お前もこひんなの蘇生すんなよな」

少女の丸い耳を軽く摘んで引っ張りながら、ブランドはあからさまに顔をしかめた。その手から庇つよつにして向きを変え、シュネイは言い返す。

「死んだら何も訊けないだろ。真冬に人間が迷いこむなんて、何年に一度あるかないかだ。長に相談して、何があつたか調べるべきじゃないのか？」

「ま、何にせよ長の判断次第だよねー。狩人には見えないけど、もしそうなら殺して食べるだけだもん」

樹上から降りてきたガイゲが調子を合わせ、それもそつかとブランドが笑う。

「ま、シユネイの事だしな。村のもんがなんて言おつと、お前の見る目は間違いねえ」

「うんうん。ブランドよりはまず間違いないよー」

「んだと、ガイゲ、てめえッ」

「あでででつ、耳引つ張らないで、耳いー！」

そんな二人のやり取りに思わず笑いながら、シユネイはほつと胸を撫で下ろす。

すると、背中にわずかな身動きを感じた。慌てて少女を背負い直し、じゅれあつている一人に告げる。

「そろそろ行くよ。見回りの報告と交替もあるし」

「そうだよ、僕らも仕事しなきやー」

「おひと、あんまサボるとまたねーさんに怒られつしな。シユネイ、
背中……気につけろよ」

「……ああ」

「じゃ、またあとでねー」

ガイゲとブランドが持ち場に戻るのを見送り、シユネイは再び歩きだす。

集落につくと、まずは見張り用の厚ぼったいテントのひとつで、シユネイは見回りの報告と交代を済ませる。それから見回り隊のリーダーであるドンネルと共に、集落の長のいるテントへ向かった。

人間を拾つたと報告すると、ドンネルはあからさまに嫌そうな顔をした。本人は人間が死ぬほど嫌いだと、普段から豪語しているほどだから、きっと見るのも嫌なのだろう。

だがそこはさすがに部隊長、すぐに捨ててこいとは言わなかつた。シユネイの意見を聞き、最もだとうなずいて、自分と共に長のものとへ連れて行くよう言つたのだ。

ただし、そのぐつたりとした体を背負つのはもちろんシユネイで、さらに頭から毛皮をかぶせるように、との指示つきだつたが。

集落の中でも一際立派なテントにつくと、この集落の長である老女が待つていた。小さな体に美しい刺繡を施された厚いマントを羽織り、物言わぬ木の如く静かに座るその姿は、幾星霜を生き抜いた巨木そのものの威厳がある。

ドンネルはそのままの前に、背負つてきたものを横たえるように指示した。

「ミステルさま」

「わかつてある。人間、だな？」

「……恐れ入ります」

シュネイがかぶせた毛皮をどけないうつむき、ヤドリギの名を持つ彼女はその中身を言い当てた。

だれも報告などしていないので、と、その力におののきながら毛皮をめくつて見せると、老女は灰色の目を見開いて驚く。横たわる少女の顔は、シュネイがかけた術のおかげで、大分生気が戻ってきていた。

「これは……なんとまあ……」

「いかがなされました？」

「……いや……なんでもない。武器は？」

「ナイフを一本。それ以外には特に武器はありませんでした。こんな軽装で、狩人とは思えませんが」

少女から取り上げたナイフを一本、自分の服の懐から取り出して、ドンネルは軽く意見を述べた。シュネイはドンネルよりも一步下がつて跪き、長の決定を待つ。

「いかがしましょうか」

「こんな真冬に、人間がモンデンヴァルトに迷い込むとはのう。確かに異常な事態ではあるが、気絶していくは何の目的で来たのか、わしにも読めんでな。この女、しばらく介抱して、体力が戻つたら再び見るとしよう。何も無ければ森の外へ帰してやるが、邪心ありしそときは、獣の宴に供そう」
「御意。して、この人間は誰が介抱するので?」
「ふむ……ドンネル、お前がやるか?」

何氣なく言われ、ドンネルはあわてて首を振る。

「そ、そんな……！ 私が引き受けたらどうなるかお分かりでしょ
うにー！」

「冗談じやよ」

老女はさもおかしそうにくちくちと声を出して笑い、ドンネルの慌てふりを楽しむ。いつも厳しい部隊長のそんな姿に、シユネイも心の中で少しだけ、笑わせてもらつた。

「さて、どうするか。人間を嫌う者は多いしの、……もうじや、シ
ュネイ」

「は、はイー！」

話を振られるとは思つていなかつたシユネイは、思わず上ずつた声で答えてしまつ。ドンネルは部下を横目で睨んだが、そんな彼の無礼な態度にも微笑んだまま、ミステルは提案した。

「拾つてきたついでじや、わしはお前が預かるのが一番よいと思つ
のじやが……どうじや？」

「……分かりました」

森のエルフに向つて、所属する集落の長の言葉は絶対だ。提案の形をとつて居るとはいへ、逆らえるはずもない。シユネイは跪いたまま頭を下げ、言葉と共に了承を示す。

「よしよし。二人とも、『苦労じやつたな。下がつてよいぞ。……
ああ、シユネイは少し話があるな。ドンネル、先にお前だけ下がる
がいい』

「では……失礼致します」

出て行くドンネルが何故か氣の毒そうな顔でシユネイを見やるが、
気付かないふりをした。頭を下げたままのシユネイと、鎮座するミ
ステルだけが一人きりでそこに残される。

一体何を言い出されるのかとびくびくしながら、シユネイは老女
の口が再び開かれるのを待つた。

第一節 Schatten (影) (前書き)

コインが両面とも裏であることがないように、
影もまた影のみで存在する事はないのだ。

ただし、コインの面はどちらとも表になりえるし、
どちらとも裏になりえるということを忘れるな。

『エーテルスタイル語録』
第六章　冒頭部分より

第一節 Schatten (影)

田を覚ますと、そこは見知らぬ場所だった。

動かすと少し痛む体をおして起き上がると、見慣れぬ厚い毛布がかけられていた。無意識に毛布を押しやると、まだぼんやりとした頭で、ふいに寒気を感じる。自分の格好を見下ろすと、着ていたはずの毛皮が脱がされており、体は動かしやすい。だが暖炉を焚いた家の中で着るような、ほんの軽装では、この場所は寒すぎた。思わず身震いをする。

ふと何かが動く気配がしたのでそちらを向くと、背の高い人物が、なにやら赤くて小さなものを抱えて入ってくるところだった。外から帰ったばかりなのか、纏う毛皮に雪が積もっている。

やや日に焼けたような印象の浅黒い肌に、雪のよつに真っ白な髪をもつた男だった。なにより目を引いたのは、帽子を脱いだ顔の横から生える、先の尖った耳。

人間じゃ……ない。

そうわかつた瞬間、自分がいる場所がどこなのか予想がついて怖くなつた。さらに幼い頃から親に刷り込まれた、恐ろしい人食い妖精の昔話が頭をよぎる。

「お?」

男がこちらを向いた。その瞳がきらりと金色に光る。そして手に持つてているのは、捌きたてとみえる肉の塊。あれは、まさか……

「いやああああ！ 人殺しい———ツ！」

少女はそばにあつた木彫りの置物を引つかみ、男に向かつて投げつけた。完全な不意打ちに男はよけきれず、額に鮭をくわえた熊がクリーンヒットする。

かくて少女が命の恩人に向けた第一声は、大変に無礼なものとなつた。

「……で、おれが凍死しかけてたあんたを助けたわけ。ちなみにあの肉は、たまたま今日見張りが狩つたトナカイで、こここの集落の皆で山分けにした中の、おれの配分ね。人間だつてトナカイくらい食うだろ？」

延々と事情を説明したあげくの締めくくりの言葉に、顔を真つ赤にした少女がぎこちなく頷いた。男はその素直な仕草に笑顔をつくると、ストーブにかけたヤカンが沸騰したのに気付いて立ち上がる。

混乱して置物を投げつけてきた少女に、精神を落ち着かせるための歌を歌い、それでも質問をまくし立ててきたのに丁寧に答えて、シユネイはようやく冤罪を晴らした。

正直なところ、エルフエが人間にどう思われているのかはよく知らない。が、彼女が目を覚ましたのに気付いた途端、飛んできた置物には、さすがの彼も驚きすぎて、声すら出せずに撃沈されたのだった。

まだなんとなくひりひりする額を気にしながら、ヤカンからティーポットへ湯を移す。よい香りがたつたところで、それを一人分のカップに注いだ。

「ほら、飲みな。とりあえずあつたまるし、落ち着くから」

取つ手のついた大きなカップに茶が満ちると、シュネイはそのひとつを少女に手渡す。おずおずと受け取つた少女の鼻腔に、甘やかな香りがふんわりと広がつた。その香りに釣られるようにして一口飲むと、染み渡る熱さが心地よかつた。

これまでに味わつしたことなどないはずだが、不思議と懐かしい味がする。無言のまま半分ほど飲んだところで、その飲み物が何で出来ているのか知りたくなり、つい口を開いた。

「これ、なんですか？」

「ん……その前にまずさ、あなたの名前を教えてくれると助かる」

何もいわずにカップの中身を啜つていた彼女を、やはり黙つて楽しそうに見守つていた青年が、目を細めて聞き返してきた。そう言われて初めて、少女は自分が名乗つていなかつたことに気付く。

「『めんなさい、まだ名乗つてなかつたんですね。あたしはステルン……ステルン＝ヒルシュです』

「ふーん、なるほど。あなたの親が古い言葉を知つてるかは知らなければ、いい名前じゃないか」

簡単に述べられただけの感想だが、褒められるとなんだかくすぐつたくなつて、ステルンは首をすくめた。ややうつむき加減で、シユネイから顔を隠すようにして、再びカップに口をつける。

「そつそう、これだけどね。ユヴェルの花の薔薇を干したお茶だよ」

「ユヴェル？」

「ああ、そつか。この草、人間は馴染みがないのかもな。このお茶には強壯や沈静の作用があつてね。香りがいいから、おれみたいに普段から飲むやつも多いけど」

おれみたいに、のところで、シユネイは軽くカップを持ち上げてみせた。

話していると、とても不思議な感じがした。エルフエのような人に近い精靈は、冥界で洗われた人間の魂から形作られる、という言い伝えがある。この少女と向かい合うと何となく安らいだ気持ちになるが、その感覚は今飲んでいる茶のせいばかりではないのだろうか。

まだ人間という生き物を見たことのなかった少年の頃、シユネイはその言い伝えを信じていた。人間とはどういうものなのだろうと想像し、大人たちに伝えられる歌からは、とても優くて、見た事もないほど綺麗な生き物を思い描いていた。それはちょうど、人間の子供がお伽噺から、蜻蛉の羽根をもつた美しい妖精を想像するようなものだろう。

だが生きていくうちに人間という生き物を知り、そのたびに心根の醜さに絶望を覚えた。周囲の人たちが人間を嫌う理由を、自らの経験で理解していた。そしていつしか、無邪気に信じた言い伝えさえも、記憶の闇に葬りさつていたのだった。

だから今回、自分がこのステルンという少女の命を助けたことがなんとなく奇妙に思えた。冬と違つて夏のモンテンヴァルトには、よく人間が入り込んでいるのだが、それが「妖精狩り」だと判断するや否や、エルフエたちは容赦なくその命を奪う。

シュネイ自身も例外ではなかつた。数え切れないほどの人間を殺してきたし、ステルンくらいの年の人間なら、害はなくても迷うま放つておくのが常だつた。いらついている時などは、初めから迷つてゐるところを術で更に迷わせて、白骨になるまで放置したことさえある。

もちろん、なにも知らないほんの子供が迷つていたのならば、どのエルフエも気付かれないよう、それとなく森の外へと導いてやるのだが。

「シュネイ……さん？」

「ん？…………ああ……」めん。一人暮らしだと、ボーッとしてる時が多くて

もやもやと考えながらいつのまにか黙り込んでいたところに、声をかけられ正気に戻る。

「どれくらい、一人で？」

「うん、まあ、そうだな。もう六十年くらいになるのかな」

「ろくつ…………？」

「？」

彼にとつては当たり前に驚いたステルンに、シュネイは一瞬怪訝そうな目をむけたが、そこではたりと自分たちの寿命が人間とかけ離れていることに思い至る。

「あー、ほら、なんていうか。エルフエには人間と似たような体もあるし、食事も話す言葉も大して変わらないけどさ。一応、精霊つていわれるくらいだし。……おれたちはだいたい五百年、生きるよ」「え……じゃ、若く見えるけど、シュネイさんって」「見えるっていうか、実際若いよ。たしか今年の誕生日で百一十七

歳、かな?」

青年の実年齢を聞いたステルンが、なぜか田をそらしてぼそりと呟く。

「……おじいちゃんなんだ……」

「いやいやいや、人間で言つたら一十五くらいだから! まだ若いよツ!」

そうえた五指を顔の前で左右に激しく振つて、即座に否定する。否定したが何故か、おじいちゃんと言わたることに焦りを覚える自分に気付く。十分若いはずなのに、一体何を焦つているというのか。考えてみて、そういえば最近、なんとなく抜け毛を気にするようになつたあたりに思い当たつて、空しくなつた。

百一十六歳にして、若干二十歳にも満たない女性に本田一一度田の
撃沈。

ステルンが田を覚ましたのは、拾つてきた田の翌日であった。治癒の術をかけていたとはいえ、まだ十分に体力の回復していない彼女にひとまず食事を取らせ、薬湯を飲ませて眠らせる。

自分のベッドをステルンに貸したシュネイは、眠る少女を気遣つて明るさを落としたランプの元で、木の枝を削り始めた。しなりの少ない硬い枝を、丹念にまっすぐ削つていぐ。

「……そんなに睨むな。不可抗力だろ、あれは

手を動かしながら、置いてあるいくつもの彫像たちに、呴くように語りかける。睨むな、と言われたのは、ステルンに投げつけられた、あの熊の彫像だつた。ちらちらと揺れる火の元で、心なしか挑むような目線をシュネイに送つているように見える。

「え、爪と牙が？ どれどれ」

作業の手を一旦止めて立ち上がると、シュネイは熊の彫像を手に取る。置いてある場所は明かりからすこし距離があるので、作業していた位置へ戻り、丁寧に彫像を眺めた。すると確かに、鮭に食い込むように彫り上げられた右の牙がすこし、傷ついていた。よく見れば鼻の先にも小さな傷があり、爪の先などは突出していた分、欠けてしまっている。

「あー、本当だ。でもお前、熊なんだからここのくらい我慢しろよ。
……おれみたいに雄じやないしつて？ 女の子は細かいなあ……」

彼らの習慣を知らないものが端から見ると、彼の行動は、木彫りの像で一人遊びをしているようにしか見えないかもしない。

エルフエは狩人として一人になると、自分の倒した獲物の魂を慰めるため、その姿をかたどつて木の彫りものをするのだ。殺された獲物の魂たちは、低位の精霊となつて彫像に宿つた。そしてその精霊達と会話することで、エルフエは自分の感覚を磨いていく。

狩るたびにいちいち彫像を作るのは、自分が奪つた命に対する敬意と感謝の気持ちを持つためもある。自分が自然に生かされているという事を忘れずに伝え、また自惚れを自制しなければならない、という考え方の表れだつた。

「……次の宴か。いいや、お前はまだ供さないよ？ ヴィンデの頃からずっとおれを見守ってくれてるお前には……ちょっとまだ、離れて欲しくないんだ」

だが、何百年も生きるエルフがそれを続けていると、たちまち自分の棲家が一杯になってしまふので、五年に一度、祭りを開いて彫像を焼く習慣があつた。獣の宴と呼ばれるその祭りで、エルフたちは彼らの神に獲物の魂を還し、願わくば再び故郷の森に生まれてくるようになると祈る。全ての魂は水のように世界をめぐっている、と信じているのだ。

「仕方ないなあ……ちょっと待つて」

シュネイは近くに置いていた道具箱から、枝を削っていたのよりも小さなナイフを取り出した。装飾を施した鹿角の柄をつかんで、大事そうに皮製の鞘から剣身を滑らせる。

よく磨いた黒曜石の刃を輝かせて、美しい一振りが姿を現した。長年使い続けているそれは、すこし刃が磨り減つてはいたが、しつくりと手に馴染んでくる。獲物の彫像を作るときは、このような石の刃を持つた専用のナイフが必要だつた。金属の刃を使うと、獣の魂が金氣を嫌つて入り込めなくなるからだ。

先ほど削つていた枝から初めにそぎ落とした細い枝の、その皮をむいて白い地肌をだす。適当な大きさに切り落として、欠けた爪の先にあてがい、爪と切り出した欠片の両方を交互に削つて、断面を合わせていく。

やがてぴつたり合つように整えると、見回りのときに持つて歩いている小物入れから、小さな蓋付きの箱を取り出した。蓋を開けると、中から半透明のどろりとした膠が現れる。

欠片を切り出したのとは別の細枝の先で、膠をほんのひとすくい

だけ取り出し、折れた爪の断面をつつくようにして、少しだけ塗る。そこに先ほどあわせた木の欠片をつけ、しばらく手で押さえた。それから細い細い布切れを引っ張り出してきて、接着部分に包帯のように巻きつけ、縛る。

「よし、と。とりあえずはここまで。乾いたら、爪の削りと一緒に傷もまとめて消すからな」

彫像をもつて立ち上がり、邪魔にならないところへ置きなおした。彫像はちょっと満足げな様子で、棚の上に黙つて座する。彫像の修復に使つた道具を元に戻しながら、ランプに照らされた足元へ視線を移すと、削りかけの長い枝が名残惜しそうに転がっていた。

「……あーあ。新しい矢柄、作っちゃまおうと思つてたのに

思わずそう呟き、軽いため息を漏らした。

毎度仕事で持ち歩く矢は、使えばもちろん折れたりして減るし、使わなくても持ち歩くうちに壊れてしまうことがある。何本か使っていたし、そろそろ点検と交換の時期だからと思ったのだが、思わぬ作業が入つてしまつた。かといって彫像のほうを放つておけば、精靈に一晩中金切り声で叫ばれたことは予想がつく。

そうなれば大変な近所迷惑だ。もちろん、精靈がどんな大音量でわめいたところで、人間であるステルンは熟睡を貫くだろうが。

「……まあいいか、明日で。休みだし」

ふわあ、とひとつ欠伸をして立ち上がると、シユネイは大きな刷毛で木屑を入り口近くに掃き始めた。矢柄を作るのに用意した枝をまとめて隅に置き、床に一枚毛布を敷く。一度外に出てスコップ一杯の灰を持ってくると、窯のなかでまだ勢いよく燃えている薪に

かぶせて、ストーブの火を小さくした。ついでにヤカンに残っていた湯で、出涸らしの茶を淹れる。

出涸らしでも十分に香りの立つ茶で体を温めた後、ランプの火をもう少し小さくしてから、毛布にくるまつた。

穏やかな寝息が一つになるのに、さして時間はかからなかつた。

第二節 Traum im Traum（夢のまた夢）（前書き）

ただ一つ言えたのは、

それは単なる夢物語でなく、

現実を知らせる予兆であったことだ。

だが必死に訴える彼の言葉を、

王も、貴族も、平民も、卑民も、

誰一人としてそれを信じはしなかつた。

『フレーゲルの道化師

第四章より

第二節 Traum im Traum（夢のまた夢）

月が怖くて眠れないと、真夜中の焚き火番をしているシユネイの隣に座つたのは、まだ幼い妹だった。シユネイと同じ真っ白な髪と浅黒い肌をもち、澄んだ空のような青い目をした妹。

「お兄……」

「アーレ。……どうしたんだ、眠れないのか？」

「うん……あのね、なんだかね、怖いの」

眠る前に見た大きな満月が、頭から離れなくなってしまつたらしい。落ちてきそうだと不安そうに訴えた妹の手が、かすかに震えながらシユネイの腰布の端をつかむ。シユネイはうつむいてしまつたアーレの頭を、くしゃくしゃと撫でた。その手が妙に小さい気がして、自分のものなのに、少し変な感じがした。

見上げれば青白い色をした月が、いまは遠く、天頂近くから一人を見下ろしていた。確かに何となく不安定で、落ちてきそうな気がする。

「歌、うたつてやろうか？」

そういうと、妹はぱっと顔をあげて、田を輝かせる。

「おうた、歌つてくれるの？」

「ああ。やうしたら、眠れるだろ？」

「うんー。お兄のうた、大好きー！」

まだ声変わりの完全に済んでいない声で、シユネイは妹の眠りの

ために知っている歌を歌いだす。人間の戦を伝える歌を歌うと、語りが進み焚き火の炎がはぜるたびに、物語の場面が浮かんでは消える。金色の炎が万華鏡のように次々とイメージを映し出すそれは、どこか現実離れしていく、とても美しいもののようにみえた。

とても強い力を持つた歌うたいである母親の血を継いだのか、シユネイは言葉を覚えたくらいの頃から、無意識に旋律に力をこめることが出来た。おかげで周りの歌い手たちにも期待され、たくさん の曲目や、力の使い方を叩きこまれてきた。やがて六十歳（人間で言えば十一歳くらい）になる頃には、既にそれなりのセングルとしての力は備えていたのだった。

「アーレ？ ……もう、寝たのか」

歌い終え、いつの間にか眠ってしまった小さなアーレを、テントの中に運ぼうとして抱きあげる。と、同時になぜか焚き火の炎が大きくなつて、彼の視界を埋め尽くした。

不思議と熱くも、怖くもなかつた。大きくなつた炎はあたりを包み込み……気がつけばシユネイは、何処かの草原にいた。

晴れ渡る空のもと、気がつけば妹の姿は腕の中から消えている。その代わり、少し離れたところに別の人物が立つていた。見覚えのあるエルフの少年だ。人間で言えば十六、七歳といったところか。それは唯一無二の親友の、懐かしい姿。

「……フェデ、ル……？」
「よつ、シユネイ」

赤味の強い金色の、長い髪を風に波打たせて、少年はにつこりと微笑んだ。シユネイを見る、暁の空のよつなすみれ色の目が、優しげに細められる。

「フェデルっ！」

駆け寄つてその肩を叩いたシユネイを片手で制し、フェデルは首を横にふつた。

「触るな。戻れなくなるぞ」

「……？」

「俺とお前の違い、分かるだろ？」

言われてみてよつやく、自分の目線が彼の頭よりも上であることに気付いた。共に過ごした頃の自分は、フェデルよりも大分背が小さくて、よくからかわれたくらいなのだ。思い出すと途端に気持ちが暗くなり、シユネイは力なく笑つた。

「そうだよ……お前は、死んだん……だよな」

「はは、そう落ち込むなよ。お前のせいじやないんだから」

ちよつと困つたように眉尻をさげる、いつもの笑い方で、フェデルは立ちぬくすばかりのシユネイを慰める。

「そういうえばお前、人間を拾つたって？」

しばらぐお互いに黙つていると、フェデルがふと思つ出したように訊ねてきた。

「……ああ、そうだ」

「氣をつけろよ」

「『氣をつけろ』？ 何に？」

対するすみれ色が、見た事もない冷たさを帯びる。覚えのない眼差しの鋭さに、シユネイは思わず身震いをした。

「分からぬいか。覚えているだろ？あの痛みを、悲しみを、憎しみを」

「フェデル？！」

フェデルの体が、足元からどんどん黒ずみ、影のようになつていく。しかし本人は、まったく氣にする様子がない。

フェデルばかりではなかつた。いつのまにか景色はぼっかりとし暗闇に飲み込まれ、そしてシユネイ自身、体の一部が闇に変わつていた。消えていく自分に気がついて、シユネイは慌ててその影から逃れようともがく。

慌てるシユネイに、そんな事をしても無駄だとでもいわんばかりに、いつも穏やかに隣で笑っていたはずの親友の、その目が暗く嗤つた。

『……忘れるな』

フェデルが、遂に片目だけになつた姿でシユネイを見た。もはや見えなくなつた口から、最後の一言をシユネイの頭の中に響かせ、その姿は完全な黒に溶けてしまつ。

それと同時に、シユネイの視界も闇に落ちた。

「 ッ！」

ぐるまつていた毛布を跳ね除けて、飛び起きた。

嫌な汗が背中を伝うのが分かった。無意識にこめかみに手を当てる。しばらく肩で呼吸をして、今いるのが現実であると全身で確めた。まだ暗い朝の空気で、少しづつ頭が冷えてくる。

「 つたぐ、なんて夢だよ……」

荒い息がよつやく整つと、髪があちこち跳ねるのも構わずに、乱暴に頭を掻いた。

「 昨日、ミステル様にあんなこと言われたからかなあ……」

ぼやきながらのつそりと起き上がると、薄ぼんやりと輝くランプに手を伸ばし、少し弄つた。火の勢いが増し、テントの中が明るくなる。

ストーブの窓を開けて、スコップで灰を掻きだし、まだ燃えそうな薪や火の消えた炭を選んで中に戻す。その上から新しい薪と炭を足し、小枝と干草の束に獸脂を浸したものを一緒に入れた。それからスコップを脇に立てかけつつ、ストーブにむけてちいさく鼻歌のようなものを呟くと、ぱつ、と干草に火がついた。小枝に燃え移るのを確認してから、蓋を閉める。

それから彼はテントの入り口の分厚い布を押し上げて、埃っぽい空気を入れ替えた。おどといとは打つて変わって、空は晴れ上がり、簾を持ち出して、さきほど掻き出した灰の山を無言で外へ追いやる。隅において愛用の弓の弦を張つて、調子を軽く確かめてから、ようやく今日が休みだという事を思い出した。

久々にもらつた休みだが、いつもどおりに起きて、つい武器の点検までしてしまったことに苦笑する。もしブランドやガイゲが休みをもらつていたら、まずこんな時間には起きていなかろう。

後ろを見れば、ステルンはまだ安らかな寝息を立てている。頬は赤みを帯び、見た目では健康そのものだ。つい一日前には真っ青な顔をして雪に埋もれ、死に掛けていたのが嘘のようだ。

しかしあの人気のない雪の中で拾われたのも含め、エルフエのすむ森に侵入しながらこうして無事生きながらえている事自体、かなりの強運の持ち主だと、シユネイは思う。エルフエが住んでいなくとも、そもそもモンデンヴァルトが大変危険な森である事は、近くに住む人間ならば十分に知っているはずだった。それをあえて入ってきたからには、何か理由があるのだろう。それとも、この華奢な見かけに反して、あの悪名高い妖精狩りだとでもいうのだろうか。

様々な憶測が頭の中をめぐるが、ため息をついてその循環を終わらせた。

ひとりで考えていても仕方がない。起きている所を長く見せれば、すべて済むことなのだ。

水がめに直接小鍋を突っ込んで水を汲むと、ストーブにかけた。切った肉と野菜を、塩と一緒にその鍋に無造作にいれてふたをする。茶色の皮をしたカルトヘ（芋）を洗い、別の鍋に汲んだ水にいれて小鍋の隣に置く。あとは適当な時間ほつておけば、朝食の出来上がりだ。

朝食ができるのを待っている間に、タベの彫像の膠が乾いたかどうかを見る。指先で動かすと、別段ぐらつくわけでもなく、しっかりとくつついているようだ。さつそく道具箱から石のナイフをもってきて、床に座り込んだまま削り始める。

さり、さり、というかすかな音が、まだ太陽の低い朝の静寂に寄り添つた。

第四節 Verirrter Pfeil(流れ矢)（前書き）

「あの輝ける太陽のもとで、我らを思い通りにしようなどとは。
自惚れも甚だしいことこの上ないな」

彼は陽気な大笑いをして、カップに注がれたトウモロコシ酒をあお
つた。

『太陽の民・メイス』
族長エルツファテルの台詞より

第四節 Verirrter Pfeil(流れ矢)

朝食を終え、また床に座り込んで昨日の矢作りの続きをしていると、ステルンがあぐびをしながら起きてきた。目をこすりこすりしながら、干草を布でくるんだベッドから抜け出してくる。

「おはよつ。よく眠れたか?」
「おはよ〜、兄ちゃん」「……兄ちゃん?」「うん、ちゃんと寝たからいいよ。私もみんなと、もう大丈夫なの」「えー……と?」「だーかーらー、ちゃんと寝たら、いいの。兄ちゃんも監も私も、だあいじょ〜ぶなお」

なんだかいまひとつ会話が成り立っていない。といつよりも、彼女が何を言わんとしているのか、シュネイには理解できない。

青年は寝ぼけ顔のステルンに苦笑しながら作業を中断すると、寝ぼけたまままだ何事かをぶつぶつと呟いているステルンに、軽く上着を羽織らせた。それからその背を押して、テントの外まで連れて行く。

やつてきたのは、飲み水以外の生活用水をためた大瓶の前だ。大きな木の蓋をどけて、四角い形の桶を瓶の中に入れて水を汲むと、隣にある木製の台にのせた。台はけよつて青年の腰くらいの高さで、ステルンの身長だと、その上で作業するのに一度よさそうな具合ではある。

「ほり、顔洗えよ。目が覚める」「んんー」

促されるままに、少女は桶に汲まれた水に手を差し入れた。そのまま一度顔に軽くかけてから、次の瞬間、大きく目を見開いて飛び上がる。

「い……つた——いツ！ 何よこれ？！」

「あつはつはつは、顔にかけてから氣付くとか！」

「ちょっと、何笑ってんのよ！」

飛び上garのも無理はない。桶の中の水には、分厚い氷の塊が幾つも浮かんでいたのだ。ふかふかと浮かぶそれは、もちろん大瓶の中に張っていたものに他ならない。きんきんに冷えた氷水は、確かに少女の目を覚ますのには効果てきめんだったようだ。

「いやだつて、普通は手え入れたら氣付……ぶはツ」「最悪！」

白銀の髪に景気よく氷水をぶっかけて、ステルンはぶんぶんと桶を振り回しながら叫んだ。真っ赤な顔は、怒りの所為なのか、氷水の所為なのか。青年は、犬のように頭を震わせて水滴を払うと、子供のように声をあげて笑う。

「うつわ、冷てつ！ ……あつはは、なんか昔を思い出すなあ」「え？」

「いやいや、こっちの話。さてと、目が覚めたところで。朝めしの用意できてるから、中に入りな。……つと、その前に……そこにかけてある布で顔拭いて、な」

台にかけてある色柄つきの布きれを示し、自分は濡れ鼠のままでテントの中に引っ込む。ステルンは首をかしげながらも言われたと

おついに顔を拭き、テントの中に戻った。

ステルンの朝食に供されたのは、早朝にシュネイが煮込んでいた、野菜のスープと茹でた芋だった。ステルンにとつては、芋も野菜も見慣れないものだ。おまけに芋には蜂蜜なんか添えてある。スープはともかく、なんだ、このけつたいな料理は。

おそるおそるスープを一口すすると、野菜や肉の出汁が口の中でじわりと広がった。塩加減は少しきついが、蜂蜜で甘みをつけた芋と一緒に含むと、これもまた塩気と調和してなんとも言えず体が温まる。無言で木のスプーンを動かす様子を、料理を作った本人は床で枝を削りながら横目で見守っていた。

「うまいか？」

「うん……なんだかいつもと違つけど、おいしい」

「ならよかつた。薬効のある草ばっか入れたから、元氣はでるぞ」

低く穏やかな声が、スープの温かみと共に、少女に安心感を与える。いつの間にか丁寧語ではなくなつていたが、シュネイの方は気付いていても何も言わなかつたようだ。なんとなく懐かしい印象を受けるのは、彼の気さくな態度のせいなのだろうか。

「食いおわつたら、長に会いに行くからな」

「長？」

もうほとんど食べ終わつたところを見計らつて、話を切り出した。こうして気がついて、彫像を投げつけたり、氷水をぶつかけたりできる元氣がある以上、早めに長に見せるべきだらう。

「「」の集落のリーダーで、森の統率者、かな。外からの来訪者がそ

の場所の偉い人に挨拶するのは、別におかしなことじゃないだろ？
そこで、あんたが何のために森に来たのかを教えてもらひつ」

理由を伝えた途端、ステルンの表情が強ばった。シユネイは気付かないふりをして作業をつづける。

「昨日も言つたけど、もともとそのために助けたんだ。出来れば自分から教えてくれると助かるんだけど」

「……言いたくないわ」

「そつか。まあ、言いたくないのなら、黙つていればいいさ」

「え……いいの？」

思わず聞き返した少女の言葉に、エルフエの男はどこか楽しそうにさえ見える顔で、くすくすと笑う。

「その分、あんたの印象が悪くなるだけだよ。……エルフエが本来、人間って生き物をあんまり好まないって事だけ、頭に入れておいてくれれば、おれは別に構わないんだけどね」

何を思つて笑うのか、その言葉の調子から読み取ることはできない。ステルンはスープの残りを、皿に直接口をつけて一時に飲み干し、木匙を置いて「じちそうさま」といった。そのまま白い頭を見やると、何でもない」とのように訊ねる。

「あなたも、人間が嫌いなの？」

「さあな。あ、食器はかまどの所に置いといでな。今、こっちも片付けるから」

さらりとはぐらかされて、少女は内心ため息をついて肩をすくめた。木屑を払い、立ち上がる男を横目に、少女は言われたとおりに

食器を片付ける。

「……そういえば

「ん？」

「さっき、あたしがかけた水。テントに入つたらもつ乾いてたよね。
どうやつたの？」

「あー、気付いてたのか。」「やつやつたんだ」

掌を上にむけて片手を前に突き出し、軽くハミングするように調子をつけて声を出すと、室内なのにふわりと風が舞う。その次の瞬間には、足元に散乱していた木屑がその手の上に球となつて集まつていた。足元だけではなく、体についていた削りかすも、ひとつ残らず綺麗になくなつている。

「すつ」「ーい！ 魔法？」

「魔法とは違うな。おれはセンゲルだから」

「センゲル？」

「あー……歌うたつて言えぱいいのかな？ 自然に祈りを捧げる
んだ」

聞いておいてうまく理解できなかつたらしく、ステルンは腕組みをして首をかしげた。

「どう違つの？」

「魔法は、魔法体系自体には法則や理があるが、自然の理は関係なしにねじ曲げて、従わせるものだ。センゲルの歌は、祈りを捧げる
ことで、世界の力を借りる。同じ結果でも、世界に与える影響が…
つて、あんまり判つてなそそつだな」

「うー……ん」

まだ頭をひねっているステルンに、シュネイはちょっと考えてから言い直した。

「んーと、無理やり従わせて使うのか、お願ひして使わせてもらつのかつて感じ。力を貸す方にとつて、どつちの方が嫌だと思つ?」

「無理やり」

「だろ。それが魔法。……まあ、あんたがそんなことにならないよう願つてるよ。さ、上着を着て」

青年はストーブの火の中に、木屑の玉をぽいと無造作に投げ入れた。玉はたちまち火に飲まれ、消し炭となる。ぱちぱちと燃える火が、嫌に嬉しそうだ。促しながら、自分も仕事のときに着る毛皮を羽織り、少女を外へ連れ出した。

広場から少し離れた、奥まつたあたりにその大きな天幕は張られている。天幕とはいってもちょっとした屋敷のようなもので、土台や骨組みは普通の家のようにしつかりと組まれているので、単に昔の習慣が名残をとじめているだけのようだ。

「……シュネイ? 長に何か用か?」

「ああ。例の娘が目を覚ましたから、連れてきた。話は通つてゐるはずだ」

「わかつた。取り次いでこよつ」

テントの前に立つ護衛と短いやり取りを済ませ、シュネイはうし

ろを顧みる。ステルンが所在なさげな顔をして、あちらこちらから興味津々に顔を覗かせている子供たちを見ていた。親たちが必死で止めているらしく、視線はすべからく色とりどりのテントの中から飛ばされている。

子供たちには、お話で聞かされる凶暴な人間と、いま目の当たりにしている華奢な少女とが、どうしても結びつかないのだろう。ほとんどの子供が、「人間ってこんなのなんだ」と目を輝かせている。

「なんだか珍獣扱いね」

「扱いつていうか、珍獣だろ。人間にとつて、エルフエが珍獣なのと同じだ」

「ちょっと、そんなこと」

「許しが出た。入つていいで」

ステルンの言葉をさえぎるよつにして、護衛が顔を出す。シユネイは彼女の言葉など、まるで聞いていなかつた風に、護衛の方を向いた。

「ああ、ありがとう。さ、行くぞ。長に失礼のないようにな」

道をあけた護衛にも奇異の目でみられながら、ステルンは改めてここが、自分の知る世界とは違うのだと感じた。どうにも居心地が悪いまま、シユネイについてテントに入る。

「ミスティルさま、人間の娘を連れて参りました」

「おお、シユネイか。入りなさい」

「失礼致します」

仕切り幕の向こうから聞こえてきた、以外にも柔らかな女性の聲音に、テントの中の一種異様な空気にたじろいでいた少女は、小さ

く安堵の息を吐く。

シュネイの後について仕切り幕をくぐると、正面の一段高いところに、一人の老婆が座っていた。緑色の刺繡の入ったゆつたりとしたケープを羽織り、穏やかに微笑むその姿は、歳を経ても失われぬ気高さと美しさを湛えている。これがエルフの長なのか、ヒステルンは思わず、感嘆のため息をついた。

「ふむ……体調は良いようじゃな」

「ええ。薬草が思いのほか効いてくれたようだ」

「お前の歌の力も大きいじゃろ？」「まあ、とにかく座りなさい」

ステルンは老婆の示した円状の筵に座る。シュネイはそこから斜めに一步下がった床に、直接胡坐をかいだ。エルフの長を目の前にして、少女は緊張に背筋を伸ばす。

「そんなに心配そうな顔をせんでも、」の場でとつて食らうつたりはせんて。わしはミステル。このヤーレスジィイトのエルフの長を務めておる」

ミステルは田の前の少女を安心させるよつて、じらじらと上品に笑つて血口紹介をした。同じく田乗るつとしたステルンに手を上げて首を振り、話を進める。

「さて、まずはじつしてこんな真冬に森に踏み込んだが、聞かせてもらおうか？ 近くの村の者なら、じつなるかくらい判つておつたはず」

穏やかな様子から一転して、有無を言わざぬ調子になる言葉。全てを見据えるような田は、嘘などついたところですぐに見抜いてしまいそうだ。ならば、ヒステルンは覚悟を決めた。震える手を膝に

押しつけると、毅然と顔を上げて答えを返す。

「近くのものではありません。ずっと西、リッスの村のものです。
冬ならほかに人間はいないと、近くの村の者に」

「リッス、だと？」

思わず声をあげたシユネイを軽く睨んで制し、ミステルは黙つて先を促した。

「……ご存知と思いますが、リッスは狩人の村です。私の父も兄も
狩人でしたし、家族は皆、エルフェに殺されました」

「それで？ 復讐でもしたいのか？」

心を読まれているのだろうか。老婆の言葉は、質問の形をとつて
はいるが、確認のそれだ。穏やかな口調とは裏腹に、目の光は獲物
に狙いを定めた鷹のようにするどい。ステルンは喉が詰まるような
思いで唾を飲み込み、やつとのことでうなずいた。

「それまでエルフェを狩つておいて、逆に狩られたからといって報
復するのは身勝手ではないのかの。のつ、シユネイ？」

「そう、ですね……」

ステルンの背後で、青年はうつむいていた。前髪にかくれた顔が
どんな表情を形作っているのかよく見えはしないが、腿に置いて握
り締められた手が震え、白く変色している。

「身勝手であるのは分かつています。父も兄も狩人である以上、覚
悟はしていたはず。ただ……盲である母は関係なかった。私の目的的
は、母を殺したエルフェだけです」

「なるほど。エルフェに手をかけていない、母御のためか。それで

エルフのいる場所を巡つておる

「はい」

老女はやや目を伏せて、思案顔になつた。しばらくしてから顔を上げ、軽いため息をつく。束ねた灰色の後ろ髪が、ぱさりと落ちた。

「ふむ……ならばもし、そのエルフがこの集落にいた時はどうする？」

「決闘を申し出ます。他のエルフは関係ありませんし」

「あんなナイフを一本ばかり持つたところで、どうやって戦うつもりじゃ」

「ひとつだけですが、魔法が使えますから。……それに大仰な武器を持つついても、いたずらに事を大きくするだけでしょう？」

少女の言葉に、ミステルは同意を示した領きを返す。

同胞を殺されたエルフの多くが人間の全てを憎むように、エルフを全て憎んでもおかしくはないというのに。彼女の恨みはたつた一人のエルフへと向けられていた。それが確固たる意思であると分かつたことで、老婆は娘に対する警戒を解く。ふと軽くなつた空氣に、ステルンは内心胸を撫で下ろした。

「この集落なら、どれくらいあれば探し終える？」

「十日ほどあれば十分だと思います」

「わかった。シユネイ、引き続いて協力してやるがよい」

「……人間の手伝いをしろとおっしゃるのですか？　ドンネル隊長ではありますんが……何をするかわかりませんよ」

ステルンを見やりながら、シユネイは長に抗議した。

ミステルも、彼がなぜそう言つのかは分かつてゐる。だが、それでも彼女は譲らなかつた。深緑の瞳で若者を見据え、諭すように言

う。

「！」の者に狩人のような邪心がない以上、宴には供せぬよ。それにお前が手伝えば、十日よりは早くここから追い出せる

「何故、おれなのですか！ よりによつてリッスの人間などー。」

遂に立ち上がり悲鳴に近い声で叫んだシユネイに、ミステルは穏やかとさえ言える声で、しかしほつきつと告げた。

「お前でなければならぬのだよ。それにこれは、恐らくお前のためにもなることじや」

「しかしつ」

「シユネイ、若者があまり年寄りを困らせるものではないぞ。撻を忘れたか？」

「……ツ……」

言外に命じられ、黙り込んでしまつシユネイ。だが、はたと場所を思い出して、しばし胸に手を当てて深呼吸をし、その顔から表情を消した。その場にひざまづいた青年に向かつて、ミステルは静かにうなずいた。

「……わかりました。長の命とあらば、私情は控えましょう」

「よろしい。ではステルン。常にエルフエの監視の下にある」と、無闇にエルフエを傷つけないこと、我らの撻に従うこと、そして十日以内に必ず集落を出て行くこと。これを条件にお前の滞在を許そうかね」

「あ、ありがとうございます！」

途端にステルンは笑顔になり、ぴょこんと頭をさげた。そんな少女を見て、老婆の口元もかすかに緩む。名乗り損ねたのに名を呼ば

れたことには、ステルン自身気が付いているのかいないのか。

「よしよし、では」これで一応の決着としようか。話はこれで終わりじゃ、一人とも下がつてよいぞ」

ふたたびこうこうと可愛らしく笑い、エルフエの老女は話を締めくくった。エルフエの男がゆっくりとした動作で礼を取り、退室しようと立ち上ると、人間の少女もミステルに頭を下げて立ち上がる。どことなく嬉しそうに出て行く少女とは逆に、青年の足取りは重い。

「シユネイ」

「はい？」

その背に声をかけられ、シユネイは立ち止まって振り向いた。相変わらず真っ直ぐに見つめる老婆の視線が、悲しげにゆがめられる。

「すまんのう、つらい思いをさせる」

「いえ。それによく考えてみれば、人間とエルフエの慣習の違いをなんとなく知っているのは、おれだけですし」

首を横に振つて力のない笑みを浮かべ、シユネイはミステルの謝罪をやんわりと否定した。

「そうか……やうじやな」

「？」

珍しく口を泳がせた彼女に、シユネイは軽く眉をひそめた。が、すぐに長に対する無礼だと気付き、表情を引き締める。

「いかがなされました？」

「いや……なんでもない。あの娘を、守つてやれ」「守る？ 人間を、ですか？」

「いよいよもつて不可解なことを言い出す長に、青年は首をかしげた。そんな彼に、老婆は説明を加える。

「エルフエを傷つけないと約束させた以上、こちらもあの娘の言う決闘以外で傷つければならんじゃろう？ 人間というだけで恨み傷つける者は沢山おるしのう。傷つければ報復を避けるため、帰さずに殺すしかなくなる。その者たちの手から守れるのもまた、お前しかおらんのじや」

重々しい口調で語る老婆に、複雑な顔でうなずくシユネイ。雪のよつな前髪がひとつ房、片目をおおい隠すようにして落ちる。

「そう、ですね……承知いたしました」「頼んだぞ」

まだ表情は暗く曇つたままであつたが、シユネイはふたたび黙つて頭を下げる。長がうなずいて見せると、彼女に背をむけ、垂れ幕をぐぐつた。

第五節 Ein blankes Schwert (白刃) (前書き)

あなたの握るその刃が、何のためにあるのか、七日七晩考えてみなさい。

『ヴァイツェス・リヒト説法集』
第三十八節より

第五節 Ein blaues Schwert (白刃)

外に出ると、ステルンがシユネイを待っていた。護衛に睨まれて肩身がせまそうにしていた彼女はぱつと笑みを浮かべ、テントからでてきた青年に近づく。

だが彼はほんやりとした顔で、するりと少女のわきを通り過ぎた。首をかしげてその背を追いかけ、服の裾を引っ張ったが無視されてしまう。シユネイ以外に知る人もないので、彼についていくしかできない少女は、仕方なしに後ろをついていった。

すると青年はテントの群れのある一帯を外れ、どんどん森のほうに入っていく。

きらきらと輝いていた雪面には黒い木々が青い影を落とし、まるで夕方のような寒さだ。しばらく歩いていくうちに、どんどん積もった雪が深くなってくる。それでも振り返る様子すら見せないので、ステルンは痺れを切らして話しかけた。

「ねえっ、シユネイ！ どこまでいくの？」

「……なんだ、まだついてきたのか」

シユネイはようやく立ち止まり、後ろを振り返った。だがその言葉はあまりにもそつけない。

「まだつて……シユネイ以外に知ってる人、いないもの」

「ああ、そつか」

それきりまた考へ込むように黙り込むシユネイ。何があつてそん

な態度をとられるのが、少女には思い当たる節がない。

「何でか知らないけど、いきなりそんな態度とられちゃ、訳がわからぬわよ。説明してくれれば、納得も出来るだらうけど」

「……すまない、少し、一人にしてくれないか」

「ちよつ

言い捨てる、白い髪の青年は雪に溶けるかのように姿を消した。

普通の人間であるステルンには、彼の姿を追う事はできない。

一人残されてしまらくその場に立ち尽くしていたが、やがて少女はとぼとぼと、もと来た道を戻りだす。雪の白さが、妙に目に染みた。

二人の若いエルフの男が、集落に程近い森の中を歩いていた。談笑しながら歩くそれは、どうやら仲のよい友人同士のようだ。そのうちの、背の低いほうがふと何かに気付いた。長い耳をぴくりと動かし、あたりを見回す。

「ガイゲ？ どうした？」

「ねえ、あれ……」

「ん？」

ガイゲの見ているほうに、彼も頭を向ける。すると少しはなれたところに、少女が一人で歩いているのが見えた。あんな子供がここで何を、とよくよく見れば耳が丸い。

「あの子、一昨日シユネイが背負つてた子じゃない?」

「あー……つていうより、なんで人間が一人でいるんだ。誰かしら見張つてなきやならねえだろが」

「あ、ブランド! 亂暴にしちゃダメだよ?」

すたすたとステルンのところへ真っ直ぐに進んでいくブランド。追いかけたガイゲの言葉が聞こえていたのかいないのか、彼女の目の前に現れたエルフエは、いきなり腰に穿いた剣を抜き放つた。

「おい、人間。こんなところで何をやつている」「…………」

出会い頭に切つ先を突きつけられる理由が分からず、ステルンは赤髪のエルフエを困惑の目で見上げた。それを挑戦ととつたらしく、ブランドはさらに眦をつりあげる。

「なんだ、その目は。……やはり人間だな、身勝手な生き物め」「だめだつてば、ブランドつ!」

遅れてついてきたガイゲが、横から剣を思い切り叩き落した。こげ茶色をした瞳がブランドを吃と睨む。普段は穏やかな彼の大声での制止に、ブランドは驚いて後ずさつた。

「人の話きけよ馬鹿! いきなりそんな風にしたら、エルフエでもびっくりするに決まってるだろ!」

「う……すまねえ」

「相手が違う。僕じゃなくて、この子に謝つてよね」

「…………」

「あーっと、いきなりごめんねー。悪いやつじやないんだけど、人間つて聞くところなつちゃうんだよ」

憮然とした顔で剣を拾い上げるブランドを叱咤し、持ち前の人懐こい笑顔でステルンのほうを向くと、強ばっていた彼女の表情がわずかにとける。

「僕はガイゲ、こっちはブランド。君は、シュネイに助けられた人間だね？」

簡単な問いに、少女はこくんとうなずく。

「どうして一人で歩いてるんだい。ここでは誰かエルフエがついてないと、自由には歩けないっていう決まりがあるんだけれど……知つてた？」

「ええと、あの……その、シュネイが、どこかに行つてしまつて……」

…

再びうなずき、ステルンはよつやく言葉を発した。やはりすこし戸惑うような小さな声ではあつたが、エルフエたちの耳には十分とどく。

「何があつたかな。ブランド」

「ん」

「この子は僕がしばらく監視役になるから、シュネイをさがして。何があつたか分からなきや、話が進まない」

「わかった。油断して殺されんなよ」

「馬鹿にしないでよ。油断してたつて、人間に殺されるほどのりまじやない」

ふう、と子供のように頬を膨らませてみせたガイゲの様子に笑つて、ブランドはやはり雪の森に溶けこむように姿を消した。風のよ

うに居なくなつた青年を見送ると、呆然とブランドの消えたほうを見て、ステルンに声をかける。

「あはは、驚いた？　あいつは森の中に姿をくらますのがうまいんだ」

「エルフって……みんなんな風に消えるんですか？」

「うーん、僕はそうでもないけど……あ、でも人間から見たら、やっぱり消えるみたいに見えるかもねえ」

のんびりとした口調でそう答えたガイゲは、「ふと目をやった少女の手が、かすかに赤く震えているのに気がついた。集落のすぐ近くとはいえ、木の陰になるこのあたりではさすがに寒い。

「とりあえず、あつたかい所に行つた方がいいね。女の子にはちょっと失礼かもしれないけど、僕のうちで大丈夫かな」

他に場所もしらないので、ステルンはうなずいた。ガイゲは自分の腰につけていた袋から予備の手袋を出して、ステルンに渡してやる。すこし大きな毛皮の手袋は、かじかんだ手に暖かかった。

森の中を歩くうちに、どこからか歌声が聞こえてきた。それは穏やかな曲かと思いきや、一変して荒々しく奇妙に調子を転じていく、森の神へ捧げられた歌。馴染みのあるその旋律を捉えた男には、それが雪色の髪の友人の声だとすぐにわかる。明るい空色の目を歌の聞こえる方に向けて、ブランドはさくさくと雪を踏んだ。

「「」たなト」にいやがつたか……」

歌はある高台から聞こえていた。森を一望できる、三人のお気に入りの場所だ。

「おい、シユネイ。シユネイ?」

近づいたブランドが話しかけても、旋律は止まない。赤髪の男は白いため息を吐いて、仕方なしに近くにおいている丸太へ腰かけた。力強さと纖細さをそなえて響き渡る歌声に、目を閉じてしばし聞き入った。高く、低く、声の主が自在に織り上げていく音のタペストリーは、芸術にとんと縁のない男の耳をすら魅了する。相変わらずすすぐえな、ヒブランドは密かに心の中で賞賛を送った。

やがて歌は終わり、ぼんやりと金色の瞳がブランドを見おろした。視線に気付いた青年は、立ち上がって彼を見つめる。

「…………」

「ああ? 何だよ。俺の顔がどうかしたか」

「…………ああ、いや、えと……なんだか、ちょっと」

「何がちょっと、だ。人間から目^え離してどうか消えやがって。見つけたのが俺とガイげじゃなかつたら、どうするつもりだボケ

自分がその人間を殺そうとして止められたことは、すっかり棚に上げてまくしたてるブランド。言われたシユネイは、そんな事は露ほども知らないので、うなだれて霸氣もなく謝る。

「すまな、い……」

「謝つたつてやつちまつたらもう、仕方ねえだろが。ちつたあ後の

「…」と考へるよな

ひととおり暴言を吐いてから、男は友人の田を心配そうにのぞきこんだ。虚ろげな目には彼が映り込んではいるが、映してはいない。その瞳の奥で何を考えているのかまではよく分からぬ。

「んで？」

「え？」

「何があつた？ 僕はミステル様と違つて、心の中は覗けたりしねえ。お前の口から話してもらわねーと、俺たちはお前を慰める事だつてできねえんだよ」

真摯に見つめてくるその視線を受け止められなくて、シユネイは田をそらす。

「……」

「殴られなきゃ わかんねえか？ それとも信用できねえか？！」

半ば脅しをこめて胸倉をひつかむと、シユネイはびっくり顔で目を見開いて、赤髪の友人を凝視した。それから軽く眉をひそめて、襟ぐりをつかむ手を軽く叩いて下ろさせる。下ろされたシユネイはコートの襟を直しながら、ぼそりとした声で答えた。

「……あの娘が、リッスの出身だと聞いて」

「リッス？」

突然出てきた名前に、ブランドはどうだそれ、とでも言いたそうな顔でシユネイを見た。白髪の青年は、友人の記憶力の悪さに思わずため息をつく。

「前に言つたわ。恨みに囚われて、おれが滅ぼした」

「ああ、あれか。……ん？ つてことは何か？ あの人間は、復讐のために来たとでも？」

「そのとおりだ、まさこ。それでおれは、ミステル様の命で……犯人探しを、手伝うことになつた」

「はあッ？！」

あんぐりと口を開けたまま、呆けたような顔になるブランド。思わずあげた彼の大声に、近くに生える何本かの木から雪の塊がすべり落ちた。

「犯人って、ミステル様、知つてんだろうが」

「もちろん知つておられるだらうさ。だけど、それでもおれに手伝えと命じられた。守れとまで」

「守れ、つて……そんな、なんつーむちやくちやな」

「なにかお考えがあるのだろうけれど、おれはなんだか……近くにいられなかつたんだ」

頭痛を抑えるときのように、シユネイは額に手をあてて首を振る。ブランドはなんだかいたたまれなくなり、目をそらして頭をかいた。しばし無言の時間が続く。

「……でも確かあれ、お前だけじゃねえだろ」

「そうだけど。でも、覚えてるんだよ……確かに、目の見えない女が一人いた」

慰めようとした言葉に咳きのないように答えて、銀髪の男はうつむいた。くもりひとつない雪が日に痛い。隣で今度はブランドが、眉をひそめて大きなため息をついた。

「つたぐ。俺らなら気にしねー事でも、お前は気にすんだな」

「そりやおれはお前じゃないから」

「やうじやなくて、普通人間殺したって何とも感じねえぞ。なのに

お前は、何でか知らんが悪いと思つてるんだな、つて事」

「……え？」

思いがけない言葉に、一瞬自分の耳を疑つた。が、ブランドはそんなシユネイにちょっと説しげな顔を向けたままで、言葉を続ける。

「だつてやうだろ？ 人間なんてビーツが死のうが生きようが、関係ねーもん。そりやエルフエ殺しちまつたら、めちゃめちゃ気にするだらうけど……例えば思いがけず殺したとして、あ、やべ、仕方ねえから今夜の夕飯にすっか、ぐりこにしか思わねー」

「う……そう、なのか……？」

「つか別に気にする必要なくねえ？ とりあえず自分が殺される心配だけしろよ。そんなに気になるなら、要はバレなきやいいんだろ？」

なんだか慰める方向がずいぶんおかしこよつた気がしたが、そう思うのも彼に言わせれば奇妙なのだろう。やはり自分はおかしいのだろうかと思いながら、シユネイはだんだん痒くなつてきた自分の耳先を、帽子の外に引っ張りだした。

そろそろ行こうぜ、と立ち上がつたブランドに向けて、少しほんやりとした顔で問つ。

「なあ、お前はおれのこと、じいの思つてる？」

「なんだ急に。気味悪いな」

「いや、なんとなく気になつて。おれが流れてきたとき、初めに味方したのブランドだしさ」

唐突にたずねてきたシユネイに、青年は首を軽く傾け、片眉を上げて返した。

「ちょっと変だけどすげえ大事なダチ。まだいろいろ隠してるっぽいのは気に食わねーけどな」

さらりと言つてから、照れ隠しのつもりかブランドは背を向ける。しばらく言われた言葉を頭の中で反芻していたシユネイは、ようやく笑つて立ち上がった。先に歩いていたブランドの背を追いかけ、立ち止まつた彼の肩を叩いてそこに額を寄せる。

「『めん……ありがとな』
「気にはすんな」

素直に礼を言つ友人の頭に、ブランドはぽんと手を置いた。

第六節 Nessel sucht nach hohem Fieber (風花)

風に吹かれた雪の花が晴天に舞う。風花、といつんだ。

なんとも素敵な言葉じゃないかね？

『ブルーメ・ブラウテの愉快な旅』より

第六節 Nessel sucht nach hoher Fieber (風花)

ガイゲのテントは、シユネイのテントよりも数段きれいに片付いていた。

すのこのような造りの床はきちんと掃き清められ、赤い染料で紋様の描かれた敷物には、目立つた汚れも見当たらない。棚や家具らしきものも整然と並べられている。女の子に失礼、と彼は言ったが、これが駄目ならシユネイの家はどれだけ失礼なんだろう、とステルンは思った。

ガイゲは入り口側の地面においてあるストーブのふたを開くと、薪を数本と干草を入れて、奇妙な輝きをもつ赤い石をひとつ放り込む。するとストーブの中に、明るいオレンジ色の火が咲いた。それから衣装箱のそばにあつた毛皮の敷物を引っ張り出し、もじもじと立っていた少女にすすめる。

すすめられるまま、ステルンはその毛皮に腰を下ろした。その間にガイゲは小鍋に汲んだ水をストーブにかける。

「少ししたら、すぐあつたかくなるからー。」めんねー、何もないから冷えやすいんだ

「い、いえ……」

「あはは、そんなに固くななくていいのにー。あ、僕の事はガイゲって呼んでよ。それに敬語も使わなくていいからねー？」

ガイゲはシユネイやブランドよりもいくぶん背が低く、すこしほつちやりとした外見はどこか親しみやすい。話し方も穏やかで、森の動物やエルフの子供たちについてのたわいもない話を聞くうちに、初めは身構えていたステルンもいつしか打ち解けていた。

「……セツコさんはブランク、ちゃんと見つけられたかなー」

話が自然と途切れたところで、ふと入口の方に目を向けて、男はそんな言葉をもひす。

「シユネイの……？」

「そうそう。まあ、歌って身を纏われてもしない限り、すぐ見つかるだろ？」「うう」

ガイゲはあまり心配していないさそりだが、ステルンにはその言葉がすこし気になつて、好奇心のままに尋ねてみる。

「もし歌つてたら？」

「一生かかっても見つけられないなー。あいつが本気で歌つたら、僕らでは絶対に敵わないよー」

「……そんなにす”いの」

意外そうな顔で眉をあげた彼女に、ガイゲはそんなことありえないけどね、と笑つた。

ステルンのカップの中身が減つているのに気づき、ガイゲは茶のおかわりをすすめてくる。少女はありがたく一杯目を貰うことにして、残りを一気に飲み干してカップを差し出した。

「あいつが、もともとまじの集落の出じゃないんだよねー」

「え？」

「詳しく述べ僕も知らないんだけどー。ほら、肌の色とか、僕やブランドとは全然違うでしょー？」

カップに注いだ一杯目の甘い茶を手渡しながら、彼はわずかに目

を締めて言つ。

あまり気にしていなかつたが、言われてみれば確かに、この集落で見かけたエルフエたちの肌は白いし、髪の色も比較的濃い。シユネイだけが、褐色の肌に銀髪という、正反対の色をしていた。

「僕が知つてる歌では、そんな姿を持つのはずっと南のエルフエなんだよねー。それも、ちょっと特別な」

「じゃあ、シユネイもその、南のエルフエのかしら」

「それは分からぬよー。たまたま歌わわれているのと合つてた、それだけかもしねないしー」

「冗談めかして笑いながら、ガイゲは一口茶をすすり、それから思い出したようにぼそりと呟く。

「……ただ、その神話に匹敵するくらいの力を持つてるのは確かかなあ」

「神話?」

興味をひかれた様子で身をのりだす少女に、彼はしまつた、と口に手を当てた。だが時すでに遅し、ステルンは興味津々でガイゲの顔を見つめている。ガイゲはうかつな自分自身にため息をついて、低く唸つた。

「うー、やつちやつたよ……まさか人間相手に語り歌うわけにもー

……」

「? シュネイは目の前で歌つてたわよ?」

「ええ? ……ああもう、シュネイつてば!」

左右に頭を振つて、呆れ顔になるガイゲ。……おおかた何か片付けるとか、火をつけるとか、そんなことで歌つたに違ひない。思わず

ず大きな声をあげたガイゲから、少女がわずかに後ずさつた。

「つてことは、もしかしてセンゲルの事は聞いてるの？」

「もしかしなくても聞いてるわよ。歌うたいだつて、シユネイは言つてたけど」

「うーん、正確には昔話の語り手、みたいなものなんだけどねー」

「その神話、聞いてみたいなー、なんて」

「いや……でも……。ちょっと人間には、刺激が強いんじゃないかなと思うんだよねー……」

「どうしても、ダメ?」

いかにも自信なさげに呟いた彼に、ステルンはいたずらっぽい上目遣いでたずねてみる。するとガイゲは観念したのか、両手をあげて首を左右にふった。

「ああ、もう、分かったよ。昔語りって言つても人間とはだいぶ違うだろうし、驚くだろうけどね」

センゲルの力が殆ど人間に知られていないのは、彼らが本来、その力を人間に見せるような場面で使わないからだ。ガイゲがいうように、歌は彼らの語りの手段である。魔法のようには見えても、もともとは攻撃向きの力ではないのだ。

ガイゲは厳かに目を閉じ、呼吸を整える。意外と長いその睫毛が伏せられる様は、親しみやすい人柄とはいえども、彼が精霊の一族であることを見せつけた。ステルンはちょっとした疎外感のようなものを感じながら、彼の口から言葉が放たれるのを待つ。

大きく息を吸つた男の口から、やがて旋律が紡がれだした。

世界のはじまりに時ありき 時の中に闇ありき
闇は光を生み 闇と光は暁と宵を生む

四神は世界を生みたまひ
世界は我らの搖り籠となる

我らは風より生まれ出で

風と共に渡りて生きる

故に風渡りの名 エルフエの名をいただく

さて これより語るは我らの同胞

風を友とし 歌を伴侶とした一族の名

前口上を歌い上げ、ガイゲはひとつ息をつく。シユネイのような軽いハミングではなく、本当のエルフエの「歌」。人間の歌手とまるで違う音の重なりに、少女はなにか酔いにも似た軽い眩暈を覚えた。

初めに風を纏いし神は
空を臨めるラウム
雨に荒ぶるストルム
大いなる風抱くヴィンド

ストルム その荒き氣性に狂いて神々の糧となり

ラウム その翼で高き空の彼方へ消えゆく

歌を奏でしヴィンド

世界を渡りゆく彼の神のみ
ひとり大地に残さるる

「きやつ……？」

ぐらり、と視界が揺らいだように感じた。

思わず目をつぶるが、とくに何も起こらない。だが、おそるおそる瞼を開くと、そこに知らない世界が広がっていた。ステルンは思わず目をこすつたが、ガイゲの歌声がはつきりと聞こえている以外には、何もかもが変わってしまったのだ。

歌と共に雷を纏った大嵐が吹きぬけて消え、猛禽に似た巨大な鳥が天高く羽ばたく。そして一人の少年が、鳥の去った緑の草原に残された。風に白く長い髪をなびかせ、金色の目を悲しげに空へ向けている。褐色の耳が尖ったその姿は、心なしかショネイに似ていた。

白き髪のヴィンド 時を経て
やがて我らの祖となりき

歌生みし その体は風より出でて
朽ちし魂は風へと還る
風の神より創られし我らも
また 風に還る定めとなる

我らは風とともに散る
歌を伝え大地に留まる
かの神の骸なり

めまぐるしく雲が流れ、草原に立つて空を見上げていた少年は、いつしか青年となつた。彼が歌うように何かを呟くと、草原に吹く風が集まって色をもち、形をもち、そして人の姿になつた。

それはまさに、今に生きるエルフの姿だ。

青年に形作られたエルフたちがやがて数を増やしていくと、彼は満足そうに笑みを浮かべて目を閉じた。その体がふわりと空気に溶け、後にはなんともいえぬ美しい玉石が残される。彼の後を追うようにエルフたちもまた眠りにつき、風に溶け、そしてその後には必ず宝石のような美しい石たちが残された。

やがて屍となりし風

その名を冠せし一族は 今も渡りて留まらず

その姿は風神の鏡 黒のからだに銀の冠

歌においてはまさに かの神を思わせ

墮ちた死者は罪を悔い 悪しき魔ですら涙する

青年の後に残された石が一つに割れ、それぞれが黒い肌に白い髪をもつエルフエになった。それは男と女のエルフエで、気がつけばいつの間にか異形の怪物たちが彼らを取り囲んでいる。しかし彼らが歌うような仕草をすると、怪物たちの体がぼろぼろと崩れ、そこから光の粒が無数に立ちのぼり、空の彼方へと消えた。

時の流れに失われゆく 風神ヴィンデの旋律よ

エルフエたる所以の旋律の 正しき力を継ぎし者ども

その名はヴィンデ 風神の血族よ

怪物を退けた二人のエルフエが天に手をかざすと、視界は白い光に覆われる。

真っ白になつたそこに、歌の余韻だけが残つた。長い歌を締めくると、ガイゲはひとつ息を吸い、大きく吐く。

ステルンはといえば、歌が終わつたにも関わらず、現実と幻の境に視線をさまよわせていた。そんな少女の様子をみて、ガイゲはぽりぽりと頭を搔く。

「ありや。音の震えを抑えれば大丈夫かと思つたけど……それでもなかつたか」

んん、と短く唸つてから、ステルンの目の前でぱんつ、と両手を合わせてみせる。存外に大きな音が出て、ぼんやりと宙を眺めてい

た少女は我にかえった。

「きやッ！…………あ、あれ、あたし……？」

「「」めんねー、こんなに効いちゃうと思わなかつたから
「え？」

眉尻を下げるガイゲに、何のことやらよく分からぬ彼女はきょとんとしてその瞳を見つめかえす。

「音を使って体感せしる、これが僕らの伝え方なんだよ」

自分たちの語り伝えは、耳からの旋律と共に、語り手の思い描く物語を見せる幻なのだ、と男は言つた。

「幻…………えと…………でもいま、どこか知らない場所にいたような…………」

「そう、それ。エルフュでもそう見えるんだけど、僕らは幻と現実の区別がすぐにつくんだ。先にちゃんと説明すればよかつたね」

そういうてから、ガイゲはすっかり冷めてしまった茶を一口飲んで、乾いた喉を潤した。そんなガイゲの顔を見つめる少女は、ハシバミ色の目を真ん丸くしたまま、まだことなく理解できていなさそうな様子だ。

「言葉に力があるわけじゃないから、それだけなら幻は見えないんだ。言葉だけで言えれば良かつたんだけど……ごめん、歌わないとちゃんと出てこなくつて」

続けざま自分を揶揄するよつこつこつと、彼は苦し紛れといつた感じで笑う。

少しの間を置いて、ステルンはようやくその意味を飲み込んだ。つまり、旋律の方に幻を見せる力があるのであって、歌詞はあまり幻には関係ないのだ。けれど恐らく、ガイゲの覚えている歌が多すぎて、曲と一緒に物語がすんなりと出てこないのである。

「そんなにあるの？」

「うん？ 何が？」

「歌。歌詞だけじゃ覚えられないくらい、なのよね？」

「ああ、うん、まあね。それが普通なん 」

ぴくり、と耳を獣のように動かし、エルフエの男は弾かれたように顔を上げた。入り口のほうを振り向いてじっと見据え、何かを探ろうとするように黙り込む。

もちろんステルンには、何が起こったのかなど分からなかつた。突然言葉を途切れさせ、危険を察知した獣のような動きをみせる彼の様子に、ひどく戸惑う。

「……ガイゲ？」

「しつ。…………村が、襲われてる」

「え？」

「くそつ、影か…………！ ……ステルンちゃん、僕が戻つてくるまで、絶対にこのテントから出ないでくれるかな。いい？」

言いながら立ち上がり、脱いでたたんであつた毛皮の外套を再び着込む。帽子を被り、弓と矢筒を携えると、焦げ茶色の瞳を鋭く光らせて入り口へ向かった。

「あ、あの……何？」

「ごめん、説明してる暇はなさそうだ。とにかく、ここを動かないでほしい」

「う……う、ん……」

幾分か抑えてはいたが、その強い口調に何も答えられず、ステルンはこくりとうなづく。それを見ると一度だけ口元を綻ばせて、ガイゲは外へ飛び出していった。

第七節 Blauer Himmel (青空) (前編)

晴れ渡る空、流れる雲。

風に遊ぶおまえの髪が、澄んだ光の冠で彩られる。

『空の下で』
第七章より

第七節 Blauer Himmel（青空）

その戦いは、人間が見たらきっと奇妙だと思うに違いない。

エルフたちが剣や弓で応戦するのは、まるで塗りつぶされたような真っ黒な闇。冬の森の白によく映えて、奇妙にうごめいている。そして実体があるようないょうつな、それらには音がない。

もちろん、音が雪に吸われている、というわけでもない。まつたくかれらには、音というものが存在していないかのようなのだ。足音も、その腕が風を切る音すらも。ぬらぬらと蠢くかれらの前で、聞こえるのはエルフ側の声や武器や術の音だけだ。

「遅いぞガイゲッ！」

「すみません、今援護します！」

遅れて駆けつけたガイゲをよく通る声で怒鳴ったのは、片刃の穂をもつ細身の銀槍を携えた背の高い女性だ。人のような虫のような、奇妙な形をしたそれが斬りつけてくるのを柄で受け流し、金糸の交じった茶の長髪をなびかせながら、その胴へ真っ直ぐに突きを食らわせる。

まるで当然とばかりに穂先は腹から背へと大穴を開けて突き出たが、まるで液体に突っ込んだかのように波打つと、黒い零を数滴散らしただけでまた元にもどつてしまつた。

だが一瞬動きを止めたそれ、丁度額ともとれる位置に一本の矢が突き刺さつた。

ぱりん、と薄氷の割れるような音がして黒の塊の動きは鈍り、ひとつ瞬く間にどろりと溶け出して形を失つていった。完全に溶けてなくなつたそれを確認すると、女はガイゲのほうを振り向く。矢を放つた姿勢のままだつたガイゲは弓を下ろし、そのままに女性はつかつかと歩み寄る。それから槍の峰で彼の頭を一度殴つた。

「あいつたあツ！」

「お前、次の休みなしな」

「……はい……」

ずれた帽子をなおす彼を横目で見やりながら、彼女はふん、と鼻をならす。

「素直でよろしい。ブランドとシュネイはどうしたかわかるか？」

「シュネイが姿を消したので……ブランドが探しに」

「ちッ。せつせつと見つけてこんな愚弟めが」

女は忌々しげに舌打ちをすると、石突をざくりと地面に突き刺した。その背後にどす黒い炎のようなものが見えたような気がして、ガイゲは思わず肩を震わせる。

「まあいい、いないものは仕方ないからな。……ところでガイゲ、喉の調子は大丈夫か？ シュネイの代わりに歌つてほしい」

「大丈夫です。いけます」

先ほど歌つたばかりではあるが、彼は力強くうなずいて見せた。その視線に女は口元を緩め、ぽん、と気遣うように軽く肩をたたく。「喉が壊れるほどは歌うなよ。あいつのよつて殲滅しようなどと思うな。動きを止めるだけで十分だ」

気遣いの言葉を口にしてから、ビルケは一瞬考え込んだ。そしてもつひとつ、と注文を付け加える。

「それと、影どもの数の把握を頼む」「わかりました……ですが」

ちらりと向こうの方の喧騒を見やる。この集落に影に効力のある歌を歌えるセングルは少ない。だが歌っている間、セングル自身は無防備なのだ。歌う間、誰かがその身を守らなければならなかつた。

「私がお前の楯になるう。シュネイとおまえと赤毛馬鹿の組み合わせにはとても敵わんがな」

「敵わないだなんて、そんな。ビルケ隊長が守つてくださるなら心強いですよ」

「ふふ、そうか。私の代わりに、あとで奴らを思いつきり殴つておけよ?」

ビルケと呼ばれた彼女は、ガイゲに殴られる一人を想像したのか、心底楽しそうに口元をゆがめてから、すぐに顔を引き締めた。

「いやで、時間が惜しい」「はい」

ビルケは槍を地面から引っこ抜くと、風を切つて駆け出した。ガイゲもそれに続く。

「くそつたれがツ」

「……これ、は、さすがに……キツイな……」

集落が影に襲われたのと時を同じくして、彼らも別の影の群れと相対していた。しかし、一人で応戦するにはあまりにも数が多くすぎる。まるで待ち伏せていたかのように現れた影たちに、ブランドは歌うシユネイを守りきる余裕がない。シユネイも自身で攻撃を捌きながら、短く旋律を紡ぎ、小出しに相手の動きを鈍らせていく。

「きりがねえな畜生……！ ガイゲさえいりや一発なのに！」

「『天よりきたる白絹の笑み 黒の穢れを覆い隠せ』……つく！ いないものは仕方ないだろ！」

右へ左へ自在に剣を薙ぐ、ブランドと背中合わせのかたちで、自身も決して得意ではない長剣を振るう。唇から乗せられた音が影の足元の雪を盛り上がらせて壁をつくり、その足を止める。

だが、「影」とは実態のない影であるがゆえにそう呼ばれるのだ。そんな足止めなどほんのわずかの時間しか効果はなく、すぐに壁から滲み出し、抜け出してきてしまう。そしてこれらは、その場の全てを殲滅しなければ決して追い払う事が出来ないという最大の難点があつた。

「せめて戦えるやつがあと一人……あと一人、居れば歌う時間くらい稼げるのによー！」

ぬるりとした嫌な感触を手に伝えながら剣が相手の胴を真つ二つにし、ブランドは顔をしかめる。再生する間に脳天からその刃を振り下ろして額の核を割り抜くが、そいつが溶けきる前にまた別の影が襲い来る。シユネイがいるので背後から来る心配はないが、次か

ら次へと漂き出でる影に辟易しながらまた剣を返した。

シユネイはシユネイで、歌いながらの戦い方をするので埒が明かない。旋律を安定させながら激しく体を動かすのは、予想以上に精神力が削られてしまうのだった。かといって歌うのをやめれば、彼の剣では影に太刀打ちなどできない。

「……あと一人、か……」
「できんのか？」

呴かれたそれを、ブラングはがさず耳にこじめる。白髪のエルフエは眉をひそめてぶつぶつと答えながら、長剣の刃を斜めに滑らせた。

「歌にかかるのがだいたい七メートル……片側を防ぐ程度の『傀儡』ならある今は」

「どのくらいかかる
「一メートル半から一メートル
「……ちいっときつついな……」

眉をひそめ、提示された時間を守つくる自信はあまりないと示すブランド。間髪いれずに降つてきた鎌状の腕を弾き、ひるんだ隙に胸を思い切り蹴飛ばしてやる。

「無理か？」
「だれが無理なんて言つたか、よー！」

蹴り倒したそいつの急所を貫き、赤毛の男はにやりと笑つた。

「ただ、ひとつ条件がある」

「なんだ？」

「俺に森の守護をくれ。じゃなきゃ途中で倒れそうだ」「守護か、わかつた。ちょっとまつてく……れなつ」

影の突き出していく太い針状のそれを防ぎ、ギリギリと鍔迫り合ひのような形になつた。力は互角、気を抜けば押し負ける。金色の瞳で色のない相手をまっすぐに睨み、腕に力を込めていく。すると、ふつ、と影の力が一瞬引いた。シユネイはその瞬間を逃さずに、短いフレーズを口にする。

『吹き抜ける風、恵みの大地、わが同胞に木々の護りを』

やや早口のそれを言い終えた瞬間、歌に氣をとられたシユネイは返つてきた影の力に負け、バランスを崩した。対する影はここぞとばかりに大きく針状の腕を振り上げ、倒れ行く瞬間のその心臓に向けて突き出す。

やられる ！

体勢を変えることの出来ない男は思わず目を閉じ、胸に突き刺さる黒い針を想像した

が、それは現実にはならなかつた。代わりにぱりん、と影の核の割れたなじみの音がして、シユネイの体は雪に優しく受け止められる。

「あつぶねー……下手したら一人仲良く死んでたな、こりや」

聞き覚えのある男の声が真上から降ってきたので瞼を開けると、
実体のない緑色の薄衣を纏つたブランドが、笑つてその手を差し伸
べていた。遠慮なくその手をつかんで起き上がりせてもらい、見渡
してみれば周囲の影どもは少し後退している。

……いや、正確には後退したのではない。近くにいた影は、全て
核を割り抜かれたのだ。その証拠に、白いはずのあたりは黒い染み
だらけである。が、それも瞬く間に透けて消えていった。

「二メートはかかるはずじゃなかつたか、あれ」

「そんな間があるか。短縮できるものは出来る限り短くするわ。…
…しかしまあ、よくやるよ。歌が間に合つても、お前じやなきやせ
られてた」

森の守護を受けたブランドは、身体能力や感覚を研ぎ澄ませた
だけでなく、失った体力までも回復されたのか、見るからに生き生
きとした顔をしていた。対してシユネイはやややつれた顔をして、
ブランドの肩を叩きながら率直な感想を述べる。

「……別におれが傀儡作らなくても、一人でいけるんじやないか?
「いや無理、気配がヤバい。多分まだでかいのが隠れてやがるし。
だから早く援護しろ」

「……了解」

軽口は終わりだとばかりに、ブランドはシユネイから数歩離れて、
再び剣を構える。今度は守りに徹するための構えだ。そう、無理に
打つて出る必要はない。だが空色の瞳はどんな敵も通すまいと、炯
々としてこる。

「創造や破壊の歌は略せないから困つたもんだよな……ちと。『
天の神、地の神、時の神、万物を司りし意志よ』！」

ちいさなぼやきの後に高らかに宣誓された、創造の初めの文句。それを合図とするかのように、ブランドの攻勢におけるのをいた影たちが一斉に動き出した。

シユネイはゆっくりと目を閉じ、足を肩幅に開いて落ち着けるよう深呼吸をする。視界を自ら遮るなど、完全にブランドを信頼しきっているからこそ出来ることだ。

信頼にこたえるように、ブランドが動いた。白い地面を蹴立て、シユネイを中心として円を描くように飛び回り、的確に影たちの急所……額の核を攻撃していく。瞬く間に地面は真っ黒に染まつたが、シユネイの足元は未だ純白のままだ。

「……光なき闇、闇なき光、暁と宵の間に眠れし意思と共にあれ……痛みを抱え、傷をつくりて創造と成した、神々の御業の如也……」

ブランドが正面で影を斬る隙に、その背後から別の影がシユネイの体を貫こうと忍び寄る。だが振り上げた蜘蛛のよつな多足を下ろす前に、その足が全て切り落とされた。

「なめんなよ？ 化け物」

にやりと笑う彼の顔は、さながら戦の鬼のようだ。剣を振るつことが楽しくて仕方がないようにさえ見える。

足を落とされひるんだ影の体を駆け上り、核に剣先を滑らせると、流れるように大きく宙へ躍り出る。下で大口を開けて待ち構える影には体をひねって刃を下にし、落ちる勢いのまま突き立てた。体重のかかった刃は一気に影の体を貫き通し、ブランドの体ごと核の部分を突き抜ける。

溶け出した黒の返り血を浴びながら、むりに闇と闇の間を疾走る
赤。

「一。」

その時だ。

シュネイの右手前方の木陰から、今までの影どもと比べると桁違
いに大きな影が現れた。木々をなぎ倒すようにぬめり、と抜け出た
それは、足元の影たちを飲み込みながら真っ直ぐにシュネイに向か
て進んでくる。

幸いにもその動きは鈍重で、まるで巨大なぬめぐじのよつて見
える。だがそれも段々と形を変えてゆき、やがて四足の奇妙な獣の
姿となつた。

「……なん、だよ……ありやあ……」

気配を感じていたとはいえ、あまりにも大きなそれを目にして、
ブランドは思わず一瞬、意識を奪われてしまつ。

黒い巨獣は、獣が水で濡れたときに似た仕草で身體いすると、お
ののくエルフに鼻面を向けて、にたりと腫つよつて裂けた口をゆ
がませた。

『…………土に還らんとする獣たち、風に還らんとする同胞たちの魂よ。
今一度わが声に応えて黄泉還れ』

その時、シュネイの歌が終わった。

同時にざわり、と彼の周りの空気が動きだし、それに呼応してロ
バルト色の影を伸ばしながら、雪の塊が渦を巻いて立ち上がり、雪
く。雪はあるで見えない手でこねられる粘土のよつて形を変え、や
がて巨大な蛇の形となる。鎌首をもたげた氷の蛇はよつくりと腹を

波打たせながら、シユネイを見下ろした。

「……」シユネイは、よつやく瞼を開く。

ちりちりと舌を出し入れしながら、つくり主の命令を待つて控える蛇と、突如現れたそれに挑むようにたたずむ黒い巨体を認識し、荒い息を懸命に整えながら次の言葉を吐き出した。

「我が声が生みし雪の彫像よ」

その台詞で氷の蛇は頭を少し下げ、獲物を捕らえるリズムを図る動きで左右に頭を揺らし始める。影の獣も、いつでも飛びかかるるよう体勢を低くした。互いに牽制しあうように存在しない目を光らせ、白蛇と黒獣が睨みあつ形となる。

「！」の世にあがむモノを滅せよ」

シユネイの声と共に、白と黒は互いを喰らい合わんと前へ飛び出した。

長引く戦いに、エルフたちの疲労の色が濃くなってきた頃。急に影たちの動きが緩慢になつた。ガイゲやほかのセンゲルたちが歌つているせいではなく、それに加えて更に鈍つたのだ。これは好機とばかりに、エルフたちは反撃を開始する。

（……？　何が起きた？）

ビルケは約束どおりガイゲの身辺を守りながら、黒い敵の鈍つた動きに眉をひそめた。一本にまとめた長い髪が体について動き、よく晴れた空からの光に反射して輝く。

「！ ビルケ隊長！」

「なんだ？！」

「森のほうから歌が……」

戦いの音にまぎれて聞こえてきたかすかな音の連なりに、ガイゲはしばし歌うのをやめて耳を澄ました。影との戦いのたびに聞きなれた旋律だ、間違つても聞き違つなんてことはない。

「シユネイの声です！」

「近いのか？」

ビルケが槍を軽く回転させて攻撃を捌き、ひと段落したところで次の獲物を探しながら訊いてきた。

彼女はガイゲほど耳がよくない。といつよりも、ガイゲやシユネイを含めたセングルたちの方が、鍛えられた特殊な耳を持っているのだが。

「僕の足で五メートルほどのところ、みたいですね」

「曲は、いつものアレか？」

「ええ」

「なるほどな。どうりで影どもの動きが一段と鈍つたわけだ」「向こうにも襲われていたんですね……どうしますか？」

ガイゲは弓に手をやりながら、ビルケを見た。今にも走つて行きたそうな彼の様子に苦笑して、ビルケは再び槍の穂を新たに湧いた

影に向ける。

「行つてこい、ガイゲ。いつも通り、しつかりサポートしてやれよ！」

「！　はい！」

にやりと笑つたビルケの言葉に、ぱっと表情を明るくして、ガイゲは一目散に森へと駆け出す。その道を轟くように立ちはだかろうとした影を、横から銀色の光が貫いた。

「貴様らの相手はこの私だ。来い」

不敵に笑うビルケ。ガイゲは彼女に軽く目礼だけして、再び駆け出す。

「…………ちッ、やべえな……アレはでけえので手一杯だし…………つってもシユネイにやこれ以上…………」

作り主の意志に従つてか、氷の蛇は巨大な黒獸と絡み合ひながら、遠くへ遠くへと運んでいく。

ぶつぶつと呴きながら、ブランドは効力の切れ掛かつた森の守護に精一杯頼つて、剣を振るい続けていた。完全な状態ではないそれが、徐々に疲れの溜まりはじめた体と共に、焦りに拍車をかける。しかしシユネイの歌が終わるまで、あと三メートはかかるのだ。歌を中断させては全てが水泡に帰すし、何よりもこの一曲以上は、

シユネイの喉が限界であろう事は想像がついた。

(くそつ……ガイゲがいりやあこんなの……)

この場にいない男を思い浮かべて、振り切るように頭を横に振る。叶わない希望は、絶望を生むだけだ。そう思いなおして、ブランドはちらりとシユネイのほうに目をやった。

そして、彼が見たのは。

影の怪物の強靭な顎が、まさにその肩に吸い込まれようとする瞬間であった。

「シユネイっ、逃げるオーッ！」

しかし、目を閉じて歌にだけ集中しているシユネイには、彼の言葉は届かない。一瞬でも気を抜いた自分を責めながら、ブランドは渾身の力で腰にさしていた短剣を投げつけた。が、どう考へても間に合いはしない。

「まつたく、しょうがないなー」

どこからか男の声がして、同時に矢を受けた影がのけぞる。ブランドの投げた短剣は黒い喉に突き刺さり、声もない悲鳴を上げたそれに追い討ちをかけるように、再び飛来した矢が額を撃ち抜いた。核を碎かれた影はあっけなく溶け出してシユネイの足元に崩れ、瞬く間に残骸は雪上にきえていった。

「 つ？！」

「もう、僕がいないと駄目なんだからー。あの状態のシユネイに、

反応できるわけないでしょー」「

「ガイゲ？！……助かつた！」

木々の間からため息をつきながら顔を出したのは、まぎれもなく見知ったぼっちゃり顔。全速力で走ってきたのだろう、肩の上下が激しい。ブランドにとつては半ば孤独といつてもよかつた戦いに、光が差した。これならシユネイの歌が終わるまであと少し、踏ん張れる。

と、余所見をしていたブランドの背後に唐突に影が現れる。だが、彼はそれを振り向くと同時に斬り上げた剣で、難なく葬った。ガイゲが来たというそれだけで、別人のように体が軽くなつてくる。

「二Jの節だと……あと二メート半つてどこかあ」

ガイゲはざつと辺りをみまわすと、手近な枝に素早く飛び乗る。それから矢筒から出した矢を三本同時につがえた。彼の矢は、シユネイが見回りに使っているものよりも幾分か、細く短い。

「セーーと。反撃開始ーー」

狙うはブランドの背後を中心とした死角。独り言と共につがえた矢を放つた。三本の矢はきれいな弧を描くと、わずかに時間差をつけながら一体の影に突き刺さる。そのうちの一本が、額の核を壊した。

よほど腕に自信があるのか、ガイゲは矢が当たつたかどうかなどろくに見もしれない。次々と流れるようにつがえ、狙い、放つ。正直なところ歌よりも、弓の方が得意なのではないかと思わせる正確さで、影たちの数を減らしていく。

「おー、さつすがガイゲ……負けてらんねー、なツ！」

一方援軍を得たブランドの方も、俄然キレのある戦いぶりが戻ってきた。背後を気にする必要がなくなつたのだ。それが疲れを押さえ込み、影どもを完膚なきまでに斬り伏せるだけの力を蘇らせた。

「いつも通り」の戦い方、それが心の余裕と冷静さを生む。

白に交わらんとする 黒は黒に還れ

闇より出でし 黄金王の眷属

古の定めの輪より 意図せずはぐれし者どもよ

我が声を聞け 理に従え

世界よ 道をばずれし彼らを

大いなる慈悲に 包み赦したまえ

やがてシュネイの紡ぐ長歌の、最後の言葉がようやく放たれた。両腕をそろえて前に突き出すと、ぐん、と一瞬にして何か目に見えないものが彼の周りに集まる。

次に閉じていた瞼を開き、腕を大きく左右に広げた。同時に彼を中心として円状に、見えない力が一気に広がっていく。透明な力の波に飲み込まれた影は動きを止め、抵抗する間もなく青白い光の粒へと分解された。分解されたあの光は、真っ直ぐ天へと昇つていく。

あの巨大な黒獣もわずかに抵抗したが、動きの鈍ったところで白蛇に首を噛み千切られ、その断面から光の粒となつて消えていった。

「……ふう

しばらく腕を広げたまま影の様子を見ていたシユネイだが、それらが全て消え去ると、ようやく息をついて肩を下ろした。ブランドはどわりと剣を投げ出して、その場に大の字に横たわり、ガイゲは枝から飛び降りるとシユネイの元に駆け寄る。

「シユネイー！」

「ああっ……えっ、あれ、ガイゲ？！」

泣きそうな顔で飛びつかれ、シユネイは目を見開いて友人の体を受け止める。

「大丈夫？ 怪我ない？ よかつたあ、幽霊じやなくてー」

「あ、ああ……。そつか、手伝ってくれたのか。ありがとうな」

まわりを見渡し、そこら中に矢が散乱しているのを見て礼をいう。ぽんぽん、とその背中を数度叩いてやってから、彼の体を引き剥がした。それから向かって左側に倒れている、赤髪の男に近よる。そばにしゃがみこみ、心配そうにその顔を覗き込んだ。

「大丈夫か？」

「おう、なんとか……でももう体中いでえや

「すまないな」

「お前が謝ることじゃねえだろ。……しつかし、非番なのに出番のときよりぐたくただぜ、つたく」

毛皮の外套はあちこち破れ、帽子もマフラーも何処かに吹き飛んでいる。顔もかすり傷だらけではあつたが、大きな怪我などはない。文句を言いながらも、赤髪の男は白い歯をのぞかせて笑ってみせた。

「やつが、よかつた」

ショネイの髪がふこにきらめく雪のように光って、ブランドは田を締めた。その脇からこむつ、と柔らかな茶色の癖毛が顔をだす。

「一人で立てる？ 立てないなら歌つてあげよつかー」

「おつ、すまねえ。頼めるか」

「いいよー。どうせまた後でビルケ隊長に殴られると思つてー

「げッ……マジかよ」

ブランドの引きついた顔を見て、ガイゲもショネイも顔を見合わせて笑う。

と、笑つたあとにショネイの顔がさつと青ざめた。

「そうだ、ここに影がいたつて事は、村は……！」

「うん、襲われたけど大丈夫だよー。ショネイの歌、向こうにいた時に聞こえてたから、届いてるはず」

「そ……つか、なら」

ほつと胸を撫で下ろし、ショネイは今度こそ心から笑う。ショネイを安心させたガイゲも再びブランドのほうを向き、治癒の歌を歌おうと息を吸い込んだ。

「ふふ、さすがは噂のセンゲルね」

そこに聞こえたのは、聞き覚えのない女の声。

第八節 Machtkampf（権力争い）（前書き）

我らに徒なす、矮小なる者どもよ。自ら守られておきながら、なんたる姿か。

ああ、お前たちはこれ以上わしを傷つけて、一体何を成さんといつのだ。

『ソングネットラーネ叙事詩』
スピエゲル王の嘆きより

第八節 Machtkampf（権力争い）

身構えた三人の前に現れたのは、エルフュの姿をした少女だつた。いくらか灰がかつた白い髪と褐色の肌をもち、空を映したような青い瞳をして、見た目はステルンよりもやや幼い印象を受ける。それが、空中に浮いているのだ。鴉のように真つ黒な、それもエルフュが決して着ないであろう華美なドレスを纏い、赤い唇を三日月の形に吊り上げている。

「しゅ……シユネイ……ガイゲ……！」

「人間？！」

「ステルンちゃん？！」

ブランドとガイゲがほぼ同時に声をあげ、三人は滞空する少女を見上げる。

腕にはステルンの体が抱えられていた。ぶらんと宙吊りになるような形で小脇に抱えられたステルンは、黒い少女の腕の中で泣きそうなほど顔をゆがめている。

ふと、黙り込んだままのシユネイに視線を移したガイゲは、彼が目を見張つたまま立ち尽くしているのに気がついた。固まつたまま凝視する先は、抱えられた茶髪の少女ではなく、褐色の肌の少女の方。

「……アー、レ……？」

やがてシユネイの口から飛び出したのは、ガイゲも何度か耳にしたことのある名前だつた。風に溶けてしまいそうなほど細い呟き

には、驚きと共に懐かしさが幾分か混じる。

「まじょ、アーレって確かお前の……」

つらうしそうに体を起こしながら、ブランドが何かを言いかける。すると白髪の男はゆっくりとうなずいた。

ショネイは信じられないといった顔で一度瞬きをし、ふたたび一人の少女を見る。つられてよくよく見てみれば、彼女たちの顔は互いによく似ていた。

「アーレ、つてかわいい名前ねえ。誰の名前?」

「…………」

「あら、意地悪なお兄さん。……もしかしたらこの体の名前?」

少女の何気ないつぶやきに、ショネイは一瞬、苦しげに眉をひそめた。するとそれはにたりと嫌な笑いを浮かべて、甲高く耳障りな声の高笑いをする。

「きやはははははは、面白いわね! ハルフェがかくまつた人間だし、すぐに食べてやろうと思つたけれど」

唇の形をゆがめたまま、高飛車に笑つた「アーレ」はショネイを見つめた。

「まさか死ぬ前の知り合いが近くにいた、なんてね。いいわ、ご馳走は後のお楽しみ……大事なものみたいだから、チャンスをあげましょう」

くすくすという声が妙に耳について離れない。

ガイゲは少女をにらみながら、ゆっくりと手をかける。困惑

した顔で震えるシユネイに、視線はむこうに向かたままでしゃべり声をかける。

「シユネイ、よく見て。あれは影だ、シユネイの知ってる誰かじゃない」
「……でもあれは」「“魂核を正しく割れなかつた”なら、あいつの話だろ。姿は似ても、中身はちがう」
「……わかつてゐる……けど……」

煮え切らないシユネイの態度にため息をついて、ガイゲは『』をつがえずには測定を始めた。

眉をひそめ、友人の口から漏れた声を無視するように、今度は言葉を成さない歌を歌う。セングル同士にだけ通じるかすかな音の流れで、意志を伝えた。

『僕がこれからあの影を射る。そしたらシユネイはステルンちゃんを助けて、村まで逃げるんだ。いま一番動けるのは僕だから、ブランドは何とかする』
「…………」

白髪の男は答えない。困惑するよつとガイゲと空中の少女とを交互に見やる。

『こぐみー』

一応訊いてはみたが、黙りこむ彼の答えを待つてゐる暇はなかつた。ガイゲは吃と口を真一文字に結ぶと、例の『』とく流れのよう矢をつがえ、放つ。

しん、とその場が凍りついた。

矢はまっすぐに少女の額に刺さつたが、影特有の核の割れた音がしなかつた。

その代わり当たったはずの矢がぱきん、とむなしい音を立てて折れ、雪の上に落ちた。黒の少女は口を三日月の形にゆがめたまで、まるで外見には不相応な表情をガイゲに向ける。少女の核を守る「殻」の思いがけない堅さに驚いたガイゲは、矢を放った姿勢のまま硬直した。雪上に膝をついているブランドや、少女に抱えられたままのステルンも、同じく目を丸くした。

「馬鹿ねえ。エルフの矢」ときで壊れるとでも思つて？」

ねつとりとした声で三人の男を見下す「アーレ」。その視線の先で歯噛みするガイゲとブランド。

シユネイだけは驚きとともにすこしだけ安堵したような、なんともいえない表情を浮かべていた。やはり自分の妹と同じ顔をしたものが死ぬところを見るのは、気が引けるのだろう。

「影なんかと一緒にしてゐなら教えてあげる。私たちは『闇』、ガルデ・シアの眷属でも上位の存在」

「……闇、だと？」

「そうよ。黄金王の手で直に魂を掬い上げられた、嘆きと恨みの声」

「嘆きと……恨み……」

少女の言葉を繰り返すようにつぶやき、シユネイはようやく表情を変えた。まだ困惑の色は抜けないが、真っ直ぐに空中の姿を見つめるその目に、光が戻る。

「ガイゲ、弓を収めたほうがいい。今やりあつても勝ち田はなさそ
うだ」

もう一度矢をつがえようと構えるガイゲを片腕で制し、シュネイ
は諦めたように頭を振った。

「何でだよっ」

「お前だつて影と戦つた後だし、あれは疲れてる様子がない」

「ふふ、賢明な判断ね」

褒められても嬉しくはないと、シュネイはアーレの形をしたモノ
に向けた視線を険しいものに変える。睨みつける青年を優越に漫る
ような表情で見下ろしながら、少女はにたにたと笑い続ける。

「さつき何か言いかけたな？ そんな人間の子供なんか攫つて、何
をするつもりだ」

「あら、何よその言い方。大事なものじやなかつたの？」

「一応は村の客人だが。……それがどうした？」

「ふうん……まあいいわ。もしこの娘、助けたいならお探し下さい。
な。宝探しって所かしら。ほうつておけば、人間なんかすぐに壊れ
ちゃうのは分かつてるわよね？」

まるでおもちゃの人形を隠すの、とでも言いたげなその台詞に、
シュネイはぎり、と歯噛みする。いまここで戦う力のないことが、
もどかしい。

「ちょっと、いい加減にしなさいよ！ 黙つてれば人を物みたいに
言つちやつて、あんた何様のつもり？！」

抱えられたステルンが急に声をあげた。黙り込んでいたのが嘘のように、手足を幼子のようにばたつかせて暴れだす。「アーレ」は腕の中で暴れだした人間に目を丸くして、それからすぐ眉をひそめて不快そうに彼女をにらみつけた。

「つるさいわね……これだから人間は嫌なのよ。力もないくせにぎやあぎやあわめくし、一人じゃ臆病なくせに集団になると途端に強気になつてみたり」

喋り続ける青い目が細められ、ふいに金色に煌くのをシュネイはみた。吐き出される言葉のひとつひとつが、まるで復讐に駆られていた頃の自分と似た感情であることに気付く。

「そういえばだまし討ちも得意なのよね？ 弱つたふりをして油断させていきなり傷つけたり、一人だと思わせておいて、火を放つて混乱させたところに襲つてきたり？」

「人間がみんなそうだと思つたら大間違いよッ」

「じゃあ人間はだれもそんなことをしないとでも？ 事実そうやってあたしは人間に殺されたのよ。誰かの腕の中から急にもぎとられて、わけもわからないうちに殺されたわ」

「つ！ ……それ、は……」

言い返され、ステルンは顔を真つ赤にすると、唇を噛んで黙り込む。そんな彼女を見て、「アーレ」は鼻で笑った。それ以上何も言わないと分かると、つまらなそうに視線を三人の方へ戻す。宙を漂う黒の少女が何を思い出してそう言つていたのか、シュネイにはすぐに検討がついた。

……やはり彼女は、妹のアーレなのだろう。本人は気づかずとも、その口が語る記憶が嫌でも確信させてくれる。

「……気が変わったわ。うるさいからやつぱり殺して血をすするのがいい」

「そつはいがんぞ、音無しの化け物」

「?!」

言い終わらぬうちに、細身の槍が背中から小さな胸を貫いた。アーレが驚く間もなく槍の柄がぐん、と横に振られ、ステルンを抱えた腕が下に向くような格好で、白い地面にその体が叩きつけられる。容赦なく少女を地面にひれ伏させたのは、銀槍操る金糸交じりの長い髪。ペリドットの瞳を凍らせて、自分を見上げる青い目を静かに睨み返す。

「隊長?!」

「義姉さん?!」

「まったく、男のくせに情けないな貴様ら……それでも私の隊のメンバーか?」

ガイゲとブランドが同時に声をあげたところへ、ビルケはため息をついて首を振る。一人は心の中でそつと、それはあんたが化け物なんだと抗議したが、何かを察知したらしい彼女のひと睨みで身をすくめた。

「まあ、そういうなビルケ。この様子だと三人とも相当力を使つたようだ、仕方なかろ?」

「ドンネル隊長……」

「! 影たちはどうしたのよ?！」

二人の「隊長」が現れたことで、アーレが驚きに声を張り上げる。ドンネルは地面に叩きつけられて氣を失ったステルンに一警だけ

をくれると、低く笑つて重そうなポールアックスの刃をアーレの目の前に突き立てた。

「さつさの『歌』を聞いていなかつたのかね。あれは我々の耳に音の届く範囲の影を『還す』ための長歌。お嬢さんこそ、エルフエをすいぶんと甘く見ていたのだな」

「……還す？ 還すですか？ 輪廻から外れた影を？ そんなことか」

「できる。今のところ、ヤーレスツァイトではただ一人だけだがな」

ビルケがちらりと見やつた先にいるのは白髪の青年。きらりと悔しげに歯を鳴らして、アーレは褐色の肌のセングルを睨む。が、やがてその顔がふたたび笑みに変わると、少女は甲高い声で笑い出した。

「あは……あはははははッ！ まさかそんな面白いエルフエがいるなんて、思つてもみなかつたわ！ きやははははッ！」

「……っ！ こいつ？！」

狂つたように笑う彼女を押さえつけようとした、ビルケの槍がずぶりと地面に沈む。急いで引き抜こうとするが、粘ついた黒に捕らわれた槍はびくともしない。塗りつぶしたような黒いしみとなつて地面に溶け込んでゆくアーレの体は、いつの間にかビルケの足をも飲み込んでいる。

「ビルケ！」

「……くそつ、抜けん！」

慌ててドンネルやガイゲがビルケの腕をつかんで引き抜くのを手伝うが、ブーツごと足までが取り込まれているようで、いくら引っ

張つたところで地面から抜けはしない。それどころか、逆に柔らかな雪にとられた足が滑り、ビルケは一気に膝までを飲み込まれた。

「さやはははははッ！ 黄金王さまにお教えしなくっちゃねー！」

田を見開いて笑いながら、ずるずると影に溶けていく少女の姿は、奇妙にゆがんだ空想画のような氣味の悪さを伴つ。

必死に抵抗するビルケに黒い薦のようなものが巻きつき、抗えぬほどの力で縛り上げていた。そしてその手を引いて取込ませまいとする男たちの腕から、あざ笑うように彼女の体を地の底に奪い去つた。

「そこの人間の替わりにもらつていいくわ。そのほうが必死になるでしょう？ ……じゃあね」

とふん、と天から落とされた水滴が地に染みるように黒が消え、さらついた声と無数の足跡だけがそこに残される。

……白の森に静けさが戻り、凍えた空気が張り詰めていた。

「ふむ……ビルケがのう」

影の襲撃がおさまつてから一アルワズ半ほど後。ヤーレスツァイトの長・ミステルは、今回の影の襲撃の顛末を伝え聞いて眉をひそめる。広間には五人の長老格のエルフエたちが集まっていた。その

中央に、先ほどの騒動でビルケが連れ去られるのを見ていたエルフエ……シュネイたち四人が控えている。

「……どここまで本当のことやう

「と、いうと？」

「彼らは人間に加担しておるのでしきう？　人間が災いを招いたのだとすれば納得がいく」

一人の言葉に、他の四人の長老が各自うなずいた。

シュネイは思わず声を出しそうになつたが、ドンネルの静かな、しかし鋭い視線にぐつと声を飲み込んだ。今、この場での彼らの発言は許されていない。

「まあ、そう言いたくなる気持ちもわかるがの、ヒンメル。しかしドンネルの人間嫌いはお主が一番よく知つておるひつ？」

「お言葉ですがミステル様」

深い皺の刻まれた顔をかすかにゆがめ、ヒンメルと呼ばれた男は一度言葉を区切る。

「人間と共にいたというだけで、影を描いたという疑いは深まります。それはどんなによく知つていようとも……たとえ我が息子であつても変わりはない」

顔を伏せたドンネルにちらりと視線をよこし、ヒンメルは頭を横に振る。その彼に賛同するように、隣にいた初老の女がうなずいた。

「そもそも影とは、我らエルフエの影。人間に魂核をうばわれ、人間の気配に強く惹かれて生き物を無差別に襲う抜け殻だという事は、それこそミステル様が良く知つておられるでしょう？」

「ふうむ……」

ミステルは長老たちの言葉に少し考え込み、瞼を軽く伏せた。

「……あの人間を殺してしまえば、何も問題はないのでは？」

静寂に突如として刻まれたヒンメルの提案に、シュネイは思わず顔を上げた。金色の皿を見開き、長老衆のうなずきにただただ絶句する。

「それもひとつ手はあるがの」

人間など全て殺してしまつべきだといつ、常の彼の意見を知っているからいや、それをこなめるよつてミステルは重い口を開いた。

「あの娘の心に邪心はないのだよ。心根が影を呼ぶのだと何度も言つておるつ？　この期に及んで、お前はまだわしの力を信じぬというのか」

「いいえ。ですが我らには確かめようがないのも事実。危険性がある以上、排除するのは当然のことでしょう」

ミステルの翠玉の視線にヒンメルは一瞬ひるんだが、それでもやや口ごもるよつにして反抗した。

「おぬしとやつ合つておると埒があかんな」

軽い嘆息と共に、小さな老女は本音を吐き出した。それからシュネイたちのほうへ顔を向ける。

「ヒンメル、伝え聞きではなく、お前たちの口から直接話を聞きた

いのじやが

「ミステル様？！」

「ぬしらは黙つておれ。公正な判断をするためには必要なことじやるつへ。」

静かに燃える縁を向けられ、ざわついた長老衆はいちどきに黙り込む。

「さて、四人とも顔をあげい。先ほどこいやつらはああ言つたがの。お前たちの中でそれが偽りだと思つじと、もしくは伝え漏れや意見があるならば申してみんか？」

ミステルの言葉に従い、四人は戸惑つよつに顔を上げた。そのうちの若い三人は目線だけを交わして、何を言つていいものか迷つているようだ。

「恐れながら申し上げます」

一番最初に口を開いたのはやはりドンネルだった。きれいに整えられたひげのある顔を長老衆にむけ、一度深く礼を取つてから話し始める。

「我々は人間に加担したわけではありません。無駄な報復を避けるため、あの人間を傷つけてはならぬというミステルさまの命に従つたまでのこと。ビルケが連れて行かれてしまったのは、彼女が捕らえた『闇』とやらの能力に絡め取られてのことです。結果的には人間が残つてしましましたが、それは單なる偶然」

ですから、と彼は言葉を続ける。

「また捕らえられる」とのないよう、あの入間を閉じ込めておけばいいのでは？」

人間嫌いのドンネルらしい言葉だ。ミステルは小さく片眉をあげただけで、ほとんど微動だにせずにそれを聞いている。ドンネルの発言を聞いて、今度はガイゲが反論した。

「恐れながら僕にも意見させてください」

ミステルがうなずいて促すと、ガイゲも礼を取った。

「襲撃が起きたとき、人間……ステルンは僕が一時的に監視していました。あの時、何か不審なことをする様子はなかつた……だから彼女に影を呼ぶ暇はない。確かに僕が家を出るとき、彼女を家中に残していきました。ですが、あの周辺に影の目に映らなくする歌仕掛けをしているのは、長老衆もご存知とは思いますが」

「加担しておればそんな言い訳は通用せん。目を離せば同じであるが。それに監視を言いつかつたのはシユネイなのだろう？なぜお前が監視しておつたというのかね？」

必死に説明するガイゲを、ヒンメルが耳ざとくどがめた。言いよどむガイゲ。沈黙に包まれる詮議の場。

だが、冷え込んだその空気を破つたのは一つの告白だった。

「おれが、監視を一時放棄したのです。俺が放置してしまったステルンをたまたま見つけて保護したのが、ガイゲとブランド。そこでブランドは俺を呼びに、ガイゲは監視に残つたと聞きました。彼が監視をしていたのはそのためです。……それから先は、先ほどご報告申し上げたとおり」

シユネイが頭を下げる。言い終えると、彼を見ていたドンネルがふと思いついたように付け加えた。

「そういえば、ビルケをさらつた『闇』とやら……あの人間とそつくりの顔をしておりましたな。ところが奴め白髪の褐色肌……」に控えるシユネイと、似たような色をしておりましたが

「！ それ、は……！」

思いがけない発言に、シユネイは思わず声をあげて呻いた。長老衆が再びざわつき、白髪の彼をにらむ。シユネイは助けを求めるように最長老のミステルを見るが、彼女は諦めるとでも言つようだ。首を横に振った。

「やうじゅのう。シユネイ、わしは話さずとも分かるが、隠し立てせず眞に話しなさい」

ぐ、と息をのむ。ためらひつつに瞳が宙をさまよご、それから観念したのか、彼はうなだれて話出した。

「……ドンネル隊長の言つ『闇』は、実の妹 アーレの『影』……だと思われます」

第九節 Pendeluhrr（振り子時計）（前書き）

人は誰しも、一度は時計を止めたがるものだ。

しかし時に振り回されることなく生きるのは、空を捕らえるよりも
難しい。

『レイゲン博士と雨の竜』
樹竜ノートウンクの台詞より

第九節 Pendeluhur（振り子時計）

今はなき、ヴィンテ族の移動集落。それは古き神々の遺した息吹がそこら中に息づき、歌い手たちが一族のほとんどを占める、外の世界からは一線を隔てたところだ。

そこが、かつてシユネイが生まれ育った、彼のあるべき場所であった。

「おーい、産まれたぞ、オツェアンー！ 男の子だー！」
「本当か、ライリク？！」

皮で作った眼帯を左目にかぶせ、不安そうな表情で何かを歌いながら小さなカヌーを漕いでいた若い男は、岸からの声に顔を輝かせた。急いで船を岸につけ、知らせに来た友人と共に自分のテントへ駆けていく。

「ミルテ、ああ、良くなってくれた……！ 僕たちの……おお、おお、すごい、元気に泣きやがるな」

嬉しそうに目を細め、オツェアンは産婆の腕の中で泣く子供の頬をつつぐ。すると赤ん坊はますます大声を上げて泣き叫んだ。

「あら、オツェアンつたら……昨日からそわそわして泣きそうだったくせに、もう笑ってる」「そんなのどうだっていいだろ？ お前が無事で、子供も無事。こんなに嬉しい事はない！」

オツェアンは疲れきった笑顔の妻を抱きしめて頬に口付け、ベー

ジユの髪を優しく撫でる。心から幸福そうな夫婦を、周りを取り囲む褐色肌のエルフェたちも笑顔で見守った。

ヴィンデに生まれるエルフェたちは、みな一様に褐色の肌と色素の薄い髪色を持っていた。それは太古の風の神の血を継ぐからだといわれている。オツエアンとミルテの間に生まれた子も例に漏れず、真っ白な髪と褐色の肌を持っていた。

「ふうむ……。“シユネイ”だな。冷たき風の巡る山の、その頂を彩る雪の名だ。……新たな仲間に、祝福があらんことを」

長に「えられた名は、集落の中でも珍しいその髪色にちなんだ物。金の田を不思議そうに長に向けながら、赤ん坊は父の腕に抱かれて己の名を聞いた。

古くからの習わしに従つて歌い、踊り、獲物を狩り、木の実を拾いながら、神々と精霊たちに祈りをささげ。そうして風の示すままに、集落を移動させて暮らしていたヴィンデ族。しかし年々生まれる子の数は減り、また昔ながらの生活を捨てて定住するものも後を断たない中で、無事に子供が産まれることはそれだけで喜びだった。風神ヴィンドの伝承にそつくりな姿をもつた子供の誕生に、その夜は集落を挙げての大宴会となつた。

シユネイは朗らかで強い父と、穏やかで優しい母のもとで、すくすくと育つた。彼が二十五になる頃には、空色の瞳を持つた妹も生まれた。四人のちいさな家族は幸せだった。

だがシユネイが六十六歳になつた年、そんなささやかに笑い合える幸運は、人間の手によつて焼け落ちた。……妖精狩りだった。

その頃のシユネイはまだ何の力も持たない子供で、両親はおろか

小さな妹ですら、守る事はできなかつたのだ。そればかりかエルフエの亡骸に当たる「魂核」さえ、そのほとんどを人間に奪われた。

ヴィンテ一族は男も女も、それぞれに力の差はあれど、皆が歌い手だつた。受け継がれてきた旋律は他のエルフのどんな歌よりも深く、また世界に及ぼす力も強かつた。

しかし、彼らが歌うのはあくまで祈りのためであり、神話を語り伝えるためだ。

武器は食料を得るための道具であり、歌は祈りを捧げる方法でしかなかつた彼らには、それらを他のエルフのように、身を守ることに使うという概念は全くなかつたのだ。といつよりも、人の目から隠れて移動する集落にはその力で身を守る必要など、ほとんどなかつたのだろう。

だから、突然襲つてきた人間どもを相手に、なす術などないに等しかつた。

もとより人間とはエルフエの兄弟であると、古来より神話に教えられて育つってきた者たちだ。なぜ攻撃されるのか、そしてなぜ彼らが魂核を奪つていくのかなど、理解できなかつたに違ひない。その滅びはあまりにあつけなく、そしてあとかたもなかつた。

「……お父さん……お母さん……返事してよ……なあ、アーレ……！」

何もかもが奪われ、燃え盛るテントの間で。まだほんの少年だったシユネイには、魂核をうばわれて抜け殻となつた家族の体が風に溶けていくのを、ただただ見守つているしかできなかつた。ぼろぼろになつた布と木々の間に吹く、悲しいまでにやさしい風

の中で。

少年は、人間を、心より憎悪した。

「……もちろん、妹はもはや生きてなどおりません。奪われた魂核は、恐らく人間の手で碎かれたでしょう。ですから妹が影になつていたところで、それはエルフエならば当たりまえのことです。ましてや、我々はヴィンデの一族。その魂がより強い闇に惹かれたからとて、おれにとつてはなんら不思議なことはありません」

今まで、集落の誰にも話してはいなかつた過去。ガイゲやブランドはあるか、ミステルにさえ頑なに口を閉ざしていた。

淡々とした口調で語られたそれに、詮議の場はしんと静まり返る。生きたまま凍りついたかのように微動だにしない人々にむけて、シユネイはふと、場違いなほほえみを見せた。

「見回りで人間を助けたとき、妹にそつくりだつたのには驚かされました」

けれど、と青年は言葉を継ぐ。

「命を助けたのは、それが理由ではありません。……いえ、個人的な感情が全くなかつたとは言わない。ですが、おれがステルンを救つたのは……森が彼女を受け入れたからです。信じられないなら森の木々に聞いてみてください。少なくともそれは、彼女が影を呼ばないという証拠にはなる」

そこまでを言い切つて、シユネイは口を開じた。とたん、長老衆がかすかにざわめく。そのなかで、やはりヒンメルが代表して声をあげ、シユネイを責めたてようと言葉を吐いた。

「では、なにがあれだけの影を呼んだ？　人間以外に何が
「おれでしょうね」

しかし青年は、凛とした声でヒンメルの言葉をさばぎる。放たれた一言に、皆が耳を疑つた。

「今、なんど？」

「影を呼んだのはおれです、と。そう言いました。影を呼んだのはステルンではない。となるとこの村で影に縁があるのはおれだけでしきう？　思い返せばあの影、ヒルフェを襲うのを面白がっていました。少なくとも今までの影のよつこ、意志なく襲つてているわけではなかつた」

はつきりとよどみなく答えるシユネイの言葉を拾い、ミステルが口を開く。

「ふむ、なるほどな。もし今回の影どもを指揮していた『闇』とやらが、おまえの妹の魂が墮ちた姿なのじゃとしたら……血縁のあるおまえに惹かれた可能性は十分にある、ということじゃの」

「ええ。ですから」

と、そこで一度言葉を途切れさせる。覚悟を決めるよつこ息を吸い込み、そうして放つた一言は。

「おれがあの影から、ビルケ隊長を連れ戻します」

しん、と場が静まり返った。

同時に長老衆とドンネルが、シユネイに嫌疑の目を向ける。ミステルと友人二人は、はっと顔を上げて彼を見つめた。言葉を交わさずとも、シユネイには自分に集まつた視線の意味するところがわかる。

なぜ、そんなにも簡単に言い放てるのか。

姿を借りただけの化け物かもしけぬが、エルpheの輪廻の法則を考えれば当然、その本人である可能性のほうが高いのだ。それにビルケを救い出すという事は恐らく、さうした相手を打ち倒さねばならない。

もとの家族を殺す覚悟を問われるのは、分かつていた。シユネイ自身、アーレの姿を前に戦えるのか……未だ迷いは晴れ切つていな。しかしこの場はそうでもいわなければ、関係のないステルンへの疑いを少しでも晴らす事はできないのだ。

しばし、長老衆との睨み合いが続いた。しかしそれでも搖るがないシユネイの目に、ミステルのため息が部屋に響く。

結局ミステルが下した結論で、詮議はシユネイの望んだおりの結末になつた。今回の騒動の、全ての罪はシユネイにあり。よつてその責任を負うがよい、と。

「それで？ 責任つたってどうするつもりなの？ シユネイ？」

ドンネルと別れ、いつも通りの三人組でぶらぶらと街でもなく村の中を歩く。

「……とりあえず、アーレの居場所を探るしかないだらうな。ビコにいるのかも分からぬし」

ステルンは未だ、ミステルの配下の監視下で軟禁されていた。彼女の手の中ならば、無闇に殺されることもないだろう。あの場ではああ言い放つたものの、実際には何の計画もなかつた。本当はある闇と戦うことにもまだ迷いがある。

「まあ、そうだよね。……なんだか大変なことになっちゃつたな」

ガイゲののんびりとした口調に、後からついてきていたブランドがぴたりと足をとめた。突然止まつた彼を、一人も立ち止まつて振り返る。

「…………

「どうした、ブランド？」

やや下をむいて、握つた拳をかすかに震わせている。だが、なぜブランドが怒つているのか、シユネイには分からなかつた。ガイゲはわざかに顔を曇らせて、向かい合つて一人の顔を見比べている。

「お前、人間をかばつたろ」

「…………

静かな怒氣をはらんだその問いに、シユネイは答えない。

「なんでだ？ 同じエルフエの義姉さんを助けるつてのは分かる。だけどあの闇つてやつは、初めつからあの人間を攫いに行つただろうが。人間なんかのために、なんでお前が犠牲にならなければならぬ？」

意外にもそれは、ステルンをかばつたこと自体よりも、むしろショネイの身を案じての言葉。だが、ショネイはますます黙り込む。

「妹に似てるからか？　本物の妹よりも、偽物の人間の方が大事なのか」

「……ブランド」

「それとも贖罪か。あのくそくだらねえ人間どもに家族殺されておいて、それでも守るつてのか？！」

「ブランドッ……」

突然の大声に一瞬びくり、と体を震わせるブランド。しかし、ひとりと見つめてくる視線には、断固として引かない。

「……あまり、怒らせるな」

「はつ。馬鹿野郎、そりやこっちの台詞だろーが」

「消されたいのか？」

怒りをこめてといつよりは、とても無感情に彼は言つ。まるで色のない雪のように、表情が冷たく消えた。金色の瞳だけが音もなく燃えている。

しばし睨み合いが続いた。
そして。

ショネイの、すう、と息を吸い込む仕草。

「ショネイ、ダメだつ！」

「ツ」

気付いたガイゲが、あわててその口に手を突っ込んだ。瞬間、噛みあわせられようとした歯に、皮膚を食い破られる。ガイゲは痛みに眉をしかめたが、この際仕がない。

シユネイが感情のままに歌えば、その言葉は現実になるのだ。「消す」という言葉は、魂ごと全てを消し去つてやるという意味だろう。生まれ変わることも、影になることさえもできない。待つのはただ、奈落の無。

「あ……？」

わずかに口に広がった血の味に、我にかえる。それを見て、ガイゲは安堵の息と共に突っ込んでいた手を引いた。はつきりと残る犬歯の痕が痛々しい。動脈が傷ついたのか、鮮やかな赤がその手からばたばたと滴つた。

「そこまで墮ちたかよ」

それは失望と共に吐かれた。青い瞳はもはや、シユネイを見ていなかつた。

「…………」

無言でブランドは、二人の側を去っていく。シユネイもまた、無言でうつむいたまま、立ち尽くしていた。

まるで吹雪が荒れ狂う直前のようだ。ただ、冬の風だけが彼らの間を吹き抜けていった。

「シユネイ、大丈夫？」

「…………いや、あの。それよりガイゲ、その、手…………」

ブランドの姿が見えなくなつてしまはうると、長い無言が気まずくなつてガイゲが話しかける。

氣を遣わせてしまつたことに後悔を覚えているのか、シユネイは噛んでしまつた手を示して応じた。ところがガイゲの方は微塵も気にせず、につこりと屈託のない笑みを見せる。

「大丈夫だよー、このくらい」

「ごめん……」

なおも頭を下げる彼に、ガイゲはゆっくりと首を横に振る。

「大丈夫だつてばー。このくらいなら、薬つけて歌えば治るでしょ
「……外見は治つても、ガイゲの歌じやすぐに中までは治せないだ
る」

いつたいどんな顎の力をしているのか。吐き出されかけた音の激しさを示すように、ガイゲの指の付け根の辺りが奇妙な方向に曲がつていて。食い破られた傷口から血があふれ、どうみても薬で治るなどと軽く言えるような怪我ではない。

シユネイは道の脇に生えている樹の低い梢から、柔らかな雪をとつてきてガイゲの手の甲に当てた。綺麗な雪で傷口の血をすすいでみると、痛々しく破れた肉が見える。自分のしでかしたことに眉をひそめながら、シユネイは軽く息を吸い込んだ。

『空よ、森よ、大地よ。あなた方の再生の力を、どうかこの小さき我らにお貸しください』

そして先ほどとは全く違う、やせしい音をその口で奏てる。するとその声に応じて、ガイゲの傷口の周りにふわりと風が舞つた。同

時に当てていた雪がするつとほじけて水となり、傷口を覆う。

「「れならおそれく、一日待たずにはずだ」

「さつすがシユネイ。ありがとー」

「いや……その、当たり前のこと、だから」

礼を言われ、シユネイは田をさらして頭を搔く。

「……それで？ 探しに行くつて、あてはあるの？」

「正直にいえばないに等しい。とりあえずヤドリギの助けを借りにいこうと思うんだ。ただ、エルフエだけのために力を貸してくれるかどうかは分からなけれど」

「ヤドリギは気まぐれだもんねー。下手に力が強い分、そう簡単に折れてくれないし」

ふう、とガイゲが軽くため息をついた横で、シユネイが険しい顔のまま腕組みをして呟いた。

「或いは……アーレに力を貸している可能性もある。あいつは、

歌える”から

「歌え……る？」

どうこうこと、と疑念の田をむければ、シユネイも難しそうにひとつ唸つて答える。どう言つていいのかよく分からないという顔だ。

「本当は普通の影でも、歌つてるんだ。まともな音にも言葉にもならない歌で、何か泣き叫んでる。だけどアーレは言葉と音を持つてる。つまり、おれ達センゲルと全く同じように歌える」

「えっと……いまいちよく分からぬ、ただけど？」

「今までエルフュの無念の姿である、としか認識していなかつた影が、自分たちと同じく「歌う」。そんなことを突然きかされて、すんなりと納得できる方がおかしい。

顔をしかめて見上げるガイゲに、シュネイは真っ白な髪に手をあてながら、すこし困ったような顔をして口を開いた。

「おれもいまいちどりの説明していいのやら。みんなみたいに普通のエルフュには、全然聞こえてないみたいだつたし……影には音なんかない、ってみんな言つけど。いつも影が来ると、おれにはひるんといくりいで」

彼の口から出る言葉を半ば呆然とした頭で聞きながら、ガイゲはゆっくりと首を横に振る。

「そんなの、信じられないよ。いくらシュネイがヴィンテの生き残りだからって、そんなことまで」

「……だろうな。だから黙つてたんだ。自分の感じてることを相手に伝えるのは、いくら歌の力を使っても難しいだろうし。この感覚を伝えるには、ミステル様みたいに相手の心を感じ取るくらいじゃないと」

一瞬、淋しげに眉をひそめるシュネイ。だが、その表情は次のまばたきとともに消え去った。握った自分の拳をみつめ、かるく歯噛みをする。

「でも今はそんなこと言つてる場合じやないだろ。アーレはもしかすると、生きてた頃の力そのままに歌える……自然の力だけじや

ない。下手をすれば人の気持ちだつて操れてしまうんだ

「え……？」

何を聞き違えたかと思い、思わず聞き返す。そして徐々にシュネイの言葉がしめす可能性に気付く、愕然とした。

「それって……つまり……」

「そうだ。ビルケ隊長が“味方のままとは限らない”

「ちよ……」

思わず叫ぼうとして、何を言つていいいのか分からなくなり、言葉を詰まらせる。何度も浅く呼吸を繰り返してから、よけやく言葉を吐き出せた。

「ちよっと待つてよ……そんなのアリなの?ー」

「ナシなら楽なんだがな。實際におれが出来るんだから、あいつにも出来る可能性はある」

軽いため息と一緒にさらりと暴露される、ガイゲのまだ知らない彼の力。ここまで無条件に信頼していたはずの友人が、急に恐ろしく思えてきた。

「ずっと昔の話だ。……今はもう、そんなことは絶対しない。何よりおれ自身が嫌だから」

そんなガイゲの思つていることが何となく分かったのか、白髪の青年は困ったような笑みを向ける。

だがそれでも、エルフエの中では珍しいほど感情の不安定なシュネイのことだ。いつ何時、持つている力が凶刃に変わるかは知れない。

ガイゲは無意識に一步、後ずさるよつと距離を広げた。するといシユネイはまた淋しげに笑つて、くるりと首を向ける。

「ステルンのところに行つてく。……つき合わせて悪かった」

言い残すと、ガイゲが止める間もなく足早に立ち去つた。
影との戦いで真新しい雪の上に残された、無数の足跡にまぎれて、
一人の足跡はもはや追えはしない。

空はただ青く、高く。

ひとりその場に残された青年を、黙つて見下ろしている。

第十節 Dunkelheit（闇）（前書き）

見よ、愚か者の人間どもが獸の宴に供されるのを。
忌むべき闇の宴に我らは踊り狂い、血をすする。

妖精を捕らえようなどという邪な輩の、結末をその目に、体に、焼き付けるのだ。

「ブルティネ・トランネン物語」
十五章「供宴」より

第十節 Dunkle Heimat (闇)

「あれ、シュネイ? ……ビーフしたの」

朱の染料で染められた布の入り口をくぐつてきたのは、見覚えのある青年だった。田を軽く伏せ、ため息などつきながらステルンの田の前に現れる。

「……いや、なんでもない」

「何でもないならなんでそんな顔してんのよ」

「まあ、ちょっと、な」

何が“ちょっと”なのかと思ひながらも、深く詮索はせずに入ルンは黙り込む。

「で、あたしに何か用? なんだかよく分からないうつむき、こんなところに閉じ込められちゃったんだけど」

やや不満交じりに両手を広げて、人が住むには狭いテントを示して見せると、シュネイは何がおかしかったのかくすくすと笑いながら答える。

「いや、特に用という用はない。元気かなと思つて」

「元気かなつて何よ」

つい先ほど別れたらばかりなのに変なことを言ひ、とステルンは少し頬を膨らませて見せる。

するとシュネイは少し首をかしげるよひとして、ふ、と何かもの

悲しげな笑みを浮かべ、ステルンの頭を軽く撫でた。驚いて固まつてしまつたステルンに気付き、青年は手を離す。

「ああ、じめん、つい」

「…………？」

シユネイに撫でられた頭に無意識に手をやつて、しばし呆然としていた彼女は、やがて少しくすぐつたやうな笑みを浮かべた。

「なんか、兄さんが帰ってきたみたい」

「……兄さん、か」

ステルンの言葉を脇へひき繰り返すと、シユネイは力が抜けたようにその場に腰を下ろす。座り込んだシユネイを見下ろすと、自分だけ立っているのも馬鹿らしく思えて、ステルンもそのままに座り込んだ。

「……軟禁されてる身じや、出せるお茶もないけど」

「いや……別に茶なら、帰ればいくらでもあるじ」

「あははっ、そりゃそうよねえ」

軟禁されていると口ではないながらも、なにか場違いな会話だと感じながら、茶髪の少女は伏せられた金色の瞳を気にして、あえてその理由には触れないように話題を避ける。

小さなストーブにかけられたヤカンが、じとじと音を立てて搖れながら一心不乱に蒸氣を吐き出していた。

なんとなく熱くなつてきた頬にひんやりとした手をあてながら、こんな沈黙の中で何をしていいのかも分からず、かといってエルフの使うストーブの温度調節の仕方もしない少女は、ただじつとエルフの青年の拳動を見守つている。

「……やつこえません」

「うん?」

ようやつと発せられたシユネイの言葉に、やや身を乗り出すよつよにしてステルンは耳を傾ける。

「ステルンの兄さんって、どんな人だったんだ?」

「あたしの兄さん?」

思いがけない質問に、わずかに困惑。だが少女は、懐かしさにすこしの間髪をおひすと、幼いこころを思い出しながらその質問に答える。

「そうね。あの時ミステル様に言つたとおり、エルフの嫌う“妖精狩り”よ。でも、あたしことつてはずじく優しくて……村の子供たちにいじめられた時は、いつも慰めてくれた」

「……いじめられてた? ステルンが?」

「何よ、その意外そうな顔」

妖精狩りの言葉に一瞬眉をひそめた後、続いた言葉にきょとんとしてステルンを見つめてくるシユネイ。彼の表情に、少女はむづと少し頬をふくらませた。

「あたし、小さい頃はいじめられっ子だったのよ。別に性格が暗かつたとか、そういうわけじゃないんだけど……母さんと似て、生まれつき体が弱かったの。村の子と一緒に雪の中で走り回るなんて出来なかつたし、それで仲間はずれにされるのも怖くて、いつも家中で本ばかり読んでた」

「へえ……数日前に会つたおれから見ると、とてもそんな風には見

えないけどな」

正直な感想を悪びれもせず述べてくる青年に、ステルンは眉尻を下げながら笑う。

「でも兄さんとあたし、ちょっと年が離れてて。だから兄さんも、いつもは父さんの仕事について行つてて、あたしがいじめられてるところにはほとんど居なかつたのよね。一ヶ月家を空ける、なんて事もしようつけりやうだつた」

シュネイは黙つたまま、ステルンの話に耳を傾けている。なんとなく何かを思い出しているようにも、ステルンには見えた。

「兄さんが帰つてくるとね、お帰りなさい、ってドアのところで出迎えたあたしの頭を、さつきシュネイがしたみたいに……ただいまつて言いながらいつも撫でてくれたの」

また無意識に頭に手をやつて、ステルンはわずかに目を細める。

「なるほどな。だからセツキ、『兄さんが帰つてきたみたい』だつて言つたのか」「

「そうそう。それに多分、兄さんが生きてたら、シュネイと同じくらいだったと思つし」

「へえ？」

テントに入つてきたときよつは幾分か明るい顔をして、シュネイはぐすくすと笑つた。

「奇遇だな。おれの妹も、生きていいたらちよつビーストルンくらいの年だつたよ。……もちろん見た目は、だけどな」

見た田は、のどに口に呑み、ステルンはやや憤慨して言い返す。

「そりゃね、ほんとに同じ歳だったら、兄さんじゃなくておじこちやんだわ」

「あれ……わりと傷つから、その、おじいちやんってのやめてくれ

「そう?」

そんなの気にするよりには見えないけど、と何か腑に落ちない顔でステルンは呟いたが、シユネイには聞こえたのかどうなのか。シユネイは困ったように笑いながら、そつだよ、とうなずいた。と、不意にシユネイの顔が強ばる。何か遠くを見るより田を細めて、彼はゆっくりと首を振った。

「どうしたの?」

「……いや、なんでもない

ステルンには聞こえないものでも聞いていたのだろうか。

何しろ相手は「妖精」だ。どんな力を持つていたとしてもおかしくはない。だからステルンも、首をかしげながらもそれ以上は聞かなかつた。

「いきなり訪ねてきて悪かつたな

立ち上がりとするシユネイに、ステルンは首を横に振る。

「いいのよ、どうせ何もする事はないし。……人探しに来たつていのこ、これじゃ何のためにこの村にいるのか分からぬわ

「……そうだな」

苦笑したステルンを見下ろす視線が、かすかにそれたような気がした。何を言うでもなく、ややぼんやりとした表情で静かにステルンに背をむけるが、彼が歩き出そうとする気配はない。

「？ 今日はなんだか変ね、シユネイ」

ぴくり、と肩を動かし。シユネイはぐるりと振り向いた。あまりにも唐突に振り向いたのでステルンは一瞬身構えるが、彼女に目をあわせることもなく、青年は無表情に口を開く。

「……たつた数日で、変がどうかなんてわからないだろ。エルフエが人間に悪意なく接する方が、変だとは思わないのか？」

先ほどまで笑いながら喋っていた人物と、同一人物だとは思えない表情だった。かけらほどの感情も読み取れないそれに、ステルンはわずかに戸惑いながらも答える。

「……初めは変だと思つてたわよ。でも少なくとも一緒にいる間、シユネイのあたしに対する悪意は感じなかつたし。それにエルフエは、所属している集落の長の命令には逆らえない」

「…………」「違ひの？」

聞き返す少女に、沈黙する男。

ちいさなテントの中で、かたこと音を立てている小さなヤカン。なんとも異様で居心地のわるい空気がただよう。

だがそんな奇妙な静けさを壊したのは、意外にも男の方だった。口の端をゆがめ、眉尻を下げて、ふ、といらえきれなくなつたように吹きだす。

「あははっ、よく観察されてるなあ。そのとおり、おれはミステル様には逆らえないし、ステルンに対する悪意も……今のところ、ない」

今のところ、だけ音量をわずかに下げていい、シユネイは軽く肩を竦める。

「だてにエルフの集落をいくつも旅してないわよ」「なるほど?」

馬鹿にするなどふんぞりかえった少女に対して、シユネイはさもおかしそうにくすくすと笑った。

「……『涙をつける』、ね……」

「え?」

「なんでもないよ。……ああ、そうやつ。軟禁中は暇だらうが、おれはしばらく来られなくなるからな」

「え……どうして?」

シユネイは、ふいに思い出したようにそれを伝えてきた。

ステルンは急にそんなことを言い出した彼に首をかしげて、なぜなのか理由をたずねてみる。すると青年は、数度首を横に振つてそれに答えた。

「せうか、ステルンは気絶してたんだったな。……あの時お前を捕まえた子供がいただろ。あれに、ビルケ隊長がさらわれた。おれは責任を取るために、隊長を探しにいかなきやならない」

「ビルケ、隊長……?」

「……銀の槍を持った、髪の長いエルフの女性がいたのを見てな

かつたか？」

「あ……」

さきほど自分を魔物の手から救つた女性だ。見忘れようはずもない。その人が、自分の代わりに魔物にさらわれたというのだろうか。

「だけど……！　あの人があらわれたなら、責任はあたしにあるはずでしょ？！」

「責任がステルンにあるなら、それはステルンを集落に運び込んだおれの責任ということ、だな。それにこれはエルフエの問題だ。人間には正直、関わって欲しくない」

言外に自分を連れて行けと訴えるステルンに、シュネイは冷ややかな態度でかえしてきた。ふう、と軽いため息をついて瞼をおろし、彼女が関わってくることを気配からも拒む。

「でも
「それに

なおも食い下がるつとある少女の言葉を遮つて、シュネイは淡々と言葉を紡いだ。

「ステルンはこの深い雪のなかで、おれ達のように森を歩き回れるか？」

「……っ

「そり。はつきり言つてしまえば、足手まといなんだよ」

ステルンはそれ以上、何も言い返せなくなる。シュネイはまた背を向け、テントの入り口へと歩み寄った。

「長居してすまなかつたな。……大丈夫。おれがいなくてもミスティル様が、お前の命を無駄に失うことを望んじやいないから」

一度入り口で振り向いてにこりと笑いかけると、彼女の言葉を待たずに入へる。表情は見えないが、何かをかたく決意していたようだ、そんなふうにステルンには見えた。

「あら、お帰り
「……おひ」

一方、イライラとした表情のまま自分の住居に帰ってきたのは、ブランドだ。

あたたかいテントの中で彼を出迎えた長髪の女性が、ぼろぼろの彼の帽子と上着を受け取りながら、不思議そうに首をかしげる。

「何、その顔。長老様たちのところで、何があったの?
「……」

ぶすりとしたまま黙り込むブランド。そんな彼の頭を、背伸びしながら平手でぺしりと軽く叩き、アイスはぶくりと頬を膨らませた。

「ブランド。いい加減にして

「何を」

「『何を』じゃないでしょ。あんたいつから脳みそまで筋肉になつたの?」

「……なんだそれ。脳みそまで防御固めた覚えはねーぞ」

呆れ顔で言い放ったアイスに、苦笑しながら言い返す。すると今度は、雪に濡れたままの帽子がべしょりと顔に飛んできた。

「んブシ……！ うおあ 冷てッ！」

「脳みそがまだ柔らかいなら、話をそらさない。私が聞いてるのは何があつたか、よ？」

「こいつと一緒に笑いながら外套を持つていないほうの手で、しゃんしゃんと音を立てるヤカンを持ち上げた彼女。しかし目が、笑っていない。

「ちよ、おまえっ……！」

「一十年も連れ添えばあなたの行動パターンなんか分かるわよ。さて、話して」

「わかったわかった！ 話すから！ だからヤカンは置け！」

じりじりとヤカンを構えて近づいてきた妻に、ブランドは慌てて態度を変える。

そんなブランドの様子を見て、ふん、とため息混じりに軽く鼻を鳴らすと、アイスは「」とつとヤカンをストーブの上に戻した。ヤカンはふたたび音を立てて、湯気を吐き始める。

「でもその前によ。とつあえずこれ、片付けねえ？」

「……そうね」

眉をハの字にさげて、濡れてしまつた髪と帽子を示すと、そんな情けない顔をしている夫に苦笑しながら、アイスも同意した。とりあえずアイスが帽子と外套をテントの中に張られたロープにかけて干し、ブランドは濡れっぱなしの頭と顔を手ぬぐいで拭う。

それから、互に向かい合ってテーブルについた。

「はい」

「……おう

いつの間にいれたのか、カップに入った熱い茶が差し出される。そして何も言わずに、向かい側で茶をすすりだすアイス。なんとか手をつけられずに、ブランドは妻の顔色を伺うようにして話出した。

「……今、ここに人間のガキが一人いんの、知つてつか」

「もちろん。というか、みんなその話題でもちきりよ。この真冬に人間なんて、まず見ないしね」

いまさら何をいいだすのかとおもえ、とでも言いそうな顔で、アイスはことりとカップを置く。

「まあ、それが理由で、シュネイもそいつを連れてきたんだけどよ」「そうよねえ。妖精狩りの男どもさえ来ないこの時期に、女の子が一人で、なんて変だもの」

当たり障りのないアイスの相槌に、ブランドは頭の中から何かを払いのけるようにしてかすかに首を動かした。「うん、とため息のような唸り声のような音を漏らし、しばし沈黙する。

それからずるずると手を伸ばし、目の前のカップの中身を一口、ゆっくりとすすった。置いたカップを掌の中でいつまでも弄ぶようにいじり、次の言葉を待つて自分を見つめてくるアイスからも目をそらす。

やがて至極いいづらいその事実に、唇が貼りついたかのように重い口を開く。

「……人間が森に来た理由とか、ミステル様がなんで滞在を許してるのはよくわからねえ。けど……あの人間のせいで、義姉さんが影に捕らわれちまつた」

「え……？」

姉とよく似たペリドットの目を見開き、夫の言葉に耳をうたがっているのが傍目からでもよく分かる。ブランドは心底から申し訳ない思いで、彼女にさきほどの影との戦闘の一部始終を説明した。

「まさか……姉さんが……」

「田の前で起こったつつつても、俺もいまいち信じられねえけど」

「めかみに片手を当てたまま、いやいやをする子供のように何度も首を振りながら、彼の言葉を聴いているアイス。聞き終えると悲しげに眉をひそめ、見るからに肩をおとして、出せる言葉もないといつた様子だ。

「大丈夫か？」

「大丈夫に見える？」

「…………すまねえ」

「謝らないでもいいわよ。それで？ 人間がさらわれかけたって事は、やつきの召集はその責任の詮議だったんでしょう？」

「ぐり、とうなづくブランド。だが何かいたたまれない思いで、妻の顔を眺める。

「詮議では、シュネイが責任を負つて義姉さんを連れ戻すことになつた

「どうこう」と？ 影を呼んだのは人間じゃないの？」

「俺もおんなじこと思つた。てかホントはあの場の誰もが、人間を追い出すか処刑するので解決すると思ってたハズだ。だけどそれを、シユネイが庇つた」

ブランドはその青い目を細めながら、シユネイの言葉を思い出して、どこか悔しげにそうつぶやいた。

アイスはそんなブランドの様子で、彼がなぜテントに帰ってきた時にイラついていたのかを察したようにひとつ、うなずく。

「つまりあんたは、人間が氣に食わないんじゃなくて、人間が影を呼んだ事實をシユネイがわざわざ捻じ曲げるような真似をしたのが気に食わなかつた、ってわけかしら？」

その鋭い指摘に、おもわず目を見開いて妻の顔を凝視するブランド。

しかし彼女は、むしろ心底あきれたような表情で、自分を見つめてくる夫のその顔にため息をついた。

「ほんとにあんたつて人は……惚れ惚れするくらい馬鹿ね」「どーいう意味だ」

むくれた顔で聞き返す声に、アイスは吃と、夫の目を睨み返すようにつつめて答えた。

「どうしてあんたは、人の気持ちを考えあげられないのよ。シユネイがどうしてその人間を庇つたか、知つてるの？」

「……それは……」

言ひよどむ彼に、更にアイスの言葉が降りかかる。

「確かに姉さんをさらつた影は、シユネイの言うとおり妹さんの墮ちた魂なかもしれない。連れてきた人間も、その妹さんに似てるのかもしないわ。けれど外面しか見てないあんたに、何がわかるつていうのよ？ 私情かもしれないけれど、シユネイが長老様たちの意向に逆らつてまで、どういう気持ちで人間を庇つているのか、あんたなんかにわかるの？」

どうしてそんなに怒るのか。

鬼のよう、とまではいかないが激しくまくしたてられる言葉の雨に、ブランドは面食らつて動けなくなつてしまつた。俺は何も悪い事を言つた覚えはない、ときょとんとしている夫に、アイスの皿がきらりと光る。

「ちゃんと聞いてる？」

「聞いてる。聞いてはいる。けど……」

「けど、何よ？」

「なんでお前が怒る。俺は何も間違つたことなんかしてねえだろが」「

はあ……、と長い長いため息をついて、アイスはブランドの理解のなさに再びこめかみに手をあてる。

「間違つてるとか正しいとかの問題じやないでしょ。なんでよりによつてあんたが、シユネイを信じてあげられないのよ」

「え？」

「あんた、シユネイが流れてきたとき、なんて言つて皆から庇つたつけ？」

急に言われても、すぐには思い出せない。何しろシユネイがヤーレスツァイトに流れてきたのは、二十年ちかくも前のことなのだ。基本的に勢いで行動しているブランドに、そもそもそんな知能を

求める方が間違いといつものだが。

「まさか覚えてないの？」

「そんな前のことなんぞ覚えちゃ いねーよ……」

がしがしどばつの悪い顔で頭をかく。弱々しい声で肯定すると、アイスが仕方なさそうに教えた。

「あんたね、よそ者の歌うたいなんか信じられないって騒いでた集落の皆の田の前で、『俺は信じる。人間じゃあるまいし、なにかたくらむような心根じやあんだけ歌えねーだろが』って言つたのよ」

「…………」

「歌うたいのことなんてなんにも分からぬはずの、あんたがね」

シユネイやガイゲのような戦いの歌こそ歌うことは出来ないが、アイスは祭りなどで精靈へ呼びかけることにに関しては、それなりの力をもつ歌い手だ。

だからこそ、その小さな一言は、ブランドにとつて重い。

「わうこや、そんなことも言つたっけ、な

言われてその時のことをよつやく思ひ出し、顔をかすかに赤らめてずるずると茶をする夫に、彼女はふ、と笑みを浮かべた。

「やつと思ひ出した。……だからね。他の誰がシユネイを疑つても、あんただけは支えてやらなきや。そりやあ友達つてのは他人だもの、意見の違いで喧嘩になる事もあるわよ。兄弟でさえ大喧嘩するんだから」

ゆつくつと、幼子に言ひ聞かせるように言葉が紡がれる。

「だけどそれでも、相手の様子がおかしかつたら気遣つてやれたり、離れてでもまた自然に繋がつたりするのも、友達つてもんじやないの？」

ブランドは急に恥ずかしくなつて、彼女から口をそらした。するとアイスは、笑いながら立ち上がる。

「今のおんたに出来ること、考えなさいよ。まあ、あんたみたいな脳みそ筋肉に出来ることなんて、そんなにないでしょ」
「……るせえな、脳みそ筋肉だのバカだの、あんまり亭主に連発するもんじゃねえよ」

「あり。亭主以外、誰に言えるってのよ？」「こんなこと」

お互に笑いながら、いつも通りの悪態をつき合つ。

アイスはポットにまた新しい湯を注ぐと、ブランドのカップに熱い茶を継ぎ足した。ふわりと広がる心地のよい香りに、ブランドはサファイアの目をゆっくりと閉じる。

それから後ろを向いた青み混じりの黒髪に、その口を開いて小さな声で呟いた。

「ありがとな」

その声が聞こえたのか聞こえなかつたのか。彼の妻は忙しそうに、家事の続きを始めていた。

第十一節 Alibtraum（悪夢）（前書き）

毎晩、妖精に馬乗りにされちまつてた男がいてヨ、参ったね。

厄介なのはその妖精、自分が悪夢を見せるつて事実にヨ、気付いちやいないつて事なのサ。

ペルツエ・ノ「ルの童話集1
「妖精物語」より

第十一節 Albträum（悪夢）

むき出しの地面の上で田を覚ましたビルケが辺りを見回すと、そこはどこかの洞穴の中だった。

そばには愛用の銀槍が、無造作に転がされている。彼女自身もかなり無造作に転がされたらしく、ところどころ体が痛んだ。動こうとするが、縛られているのか腕がうまく動かない。両足も足首や太腿を何かで固められているようで離れないので、うまく起き上がる事ができない。そもそもと芋虫のように体全体を動かしてはみるが、やはり自由が利かなかつた。

「…………ちしぃ

思わず舌打ちをして、寝たまま壁までの距離を田で測った。

……だいたい三マルタといつたところか。ゆっくりと足を動かし、地面を蹴つて、少しずつ壁際まで転がりはじめる。壁際につくと、岩壁に背を擦りつけるような格好で、よつやく体を起こした。

「…………」

壁に寄りかかったままで、辺りを見まわす。転がされていたのは、幸い穴の口から程近い位置だ。奥のほうへと小石を蹴つて、反響に耳をすませれば、そこはそれほど広くも深くもない穴らしいと分かつた。

外に田をやれば、洞穴は山の上か崖の途中にでもあるのか、下のほつに雪をかぶつた木々が連なっているのが見えた。景色が薄暗い青に染まっているところをみると、今は夕方か朝方なのだろう。太陽や星は見えないので、今の時刻が朝なのか夜なのかは、つかがい

知るにじが出来なかつた。

はあ、と大きくひとつ息を吐いて、ビルケは首を回す。周りの様子はだいたい分かつたが、肝心の状況が把握できない。

確か、あの子供の姿をした影の奇妙な攻撃に捉われて、真っ暗な闇の中に落ちこんでしまつたのは覚えている。その闇の中で少しづつ意識がなくなり、気がつけばこの有様だ。

あんな子供に負けるとは。

我ながら情けないと、ビルケは再度ため息をつく。

ところどころはどこなのだろうか。風の音と匂いから、モンテンヴァルトからそう離れてはいないことはわかる。だが、普段から様々な精霊たちがそこらじゅうで遊びまわつてゐるような中で暮らしているビルケだ。そんな彼女からすれば、ここは死んだ場所と言わざるを得なかつた。精霊の声が聞こえないどころか、それらがひそんでいる気配すらしないのだ。

感じられるのは冷たい風の、悲しげに泣きわめく声だけ。ひゅうり、ひゅうりと音をたてて過ぎていく、穴の外の乾いた音のほかには、虫の這う様子さえなかつた。

「とんでもない」ところに来てしまつたな……」

思わずこめかみを押されたくなつたが、肝心の手はまったく動かせないのである。

……しかし、いつまでこいつしていればいいのか。敵の気配も一切ないのが唯一の救いだが。

などと無駄にいろいろと考え込んでいると、気がつけば目の前に何かがあらわれた。音も気配もなく突如として現れたそれを警戒しながら、ゆっくりと顔を上げる。

案の定、あの華美な黒いドレスを纏った少女が、ぬらりと闇に浮かんでいた。暗い色彩のなか、見覚えのある男と良く似た白髪がひどく目立つ。

だが、初めに会ったときのような、その人を見下すような妖艶な笑みはどこにもなかった。むしろどこか悲哀を帯びたような、そんな目ばかりが印象に残る。……まあ、どちらにせよ目に映る姿と同じような年の子供たちが浮かべるような表情ではない、のは確かだが。

「何をみていろ?」

何も言わずにただ自分を見つめてくるそれに、すこしあかりいらついた調子で問い合わせる。

「あなたのこじみ」
「は?」

問いかには、なんとも突飛な答えが返ってきた。咄嗟には理解できず、ビルケは眉をひそめて少女を見つめ返す。ビルケを見下ろす少女は、訝しげに見上げてくる彼女の視線には一切答えず、ふい、と背を向けた。

「冗談よ」
「化け物でも冗談を言つのか……」
「何よ、悪い?」

悪びれもせずに言られて、がっくりと肩を落とす。

こいつは敵の大将のはずだが……と思つと、なんだか急に気が抜けてしまった。思わずため息を吐きながら、首を左右に振つてしま

う。

「……何か、だまされているような気分だ」

「お姉さん、面白いわね」

ビルケの様子を見てクスクスと素直に笑う彼女は、今まで知っていた「影」とはやはり違っている。本人は「闇」と名乗るが、それがいつたいどうこうものであるかも分からない。だが、どうやら個人の感情があることだけは確かのことだ。

「お前は、一体何なんだ?」

考へても仕方ないとばかりに、単刀直入に聞いてみる。すると少女は首をかしげて、問い合わせるように答えてきた。

「初めて会ったとき、言ひたじやない?」

さも当たり前のことに返つてきたそれに、ビルケは少しばかり苛ついた調子でもう一度たずねる。

「だから、その『闇』とは何か聞いていい。私たちの知つてゐる影とは違うのか?」

「……そうねえ。どうせ暇だし、お姉さんに少し付き合つてあげるわ」

薄暗い洞窟という場所にひどく似合わない格好の少女は、ふわりと宙に腰かける。空氣の上に乗つたように足が浮き、優雅に座るその姿は、地面に縛られたまま足を投げ出して座つているビルケとは対照的だ。

もつとも、そもそもが縛られた成人女性とドレスの少女、という

取り合わせ 자체、端から見れば奇妙で仕方ないのではあるが。

「夜の精靈王、ガルデ・シアの事は知ってる?」

「……魔物どもの『もと』を作った、金色の少女のことだったか?」

四刻神に祝福を受けずに生まれた、『最後の双子』の片割れの『

「ふふ、さすがエルフ。あたしたちは“黄金王”をまつて呼んでるけれど。じゃあ、そもそも魔物がどうして生まれるかっていうのは知ってるかしら」

何故か嬉しそうに、そう彼女は尋ねてきた。

どうして魔物が生まれるのか。そんなこと、エルフならば子供だって知っている。

「お前は私を馬鹿にしているのか? 魔物が生まれてくるのは、魔物という存在が全ての命の終なるもの、だからだろうが」

「あり、馬鹿になんてしないわよ。ただの確認じゃない、そんなに怒らないでちょうだい」

上目遣いに歯み付しそうなほど睨みつけているビルケをからかうみたいにあじりつと、彼女は足を組み替えた。

「そり。あたしたち魔物は、全ての命の終着点」

ゆっくりと、子供に言い含めるように言葉を奏でる。その言葉のあとの沈黙に、その言葉を頭の中で反芻したビルケは首をかしげた。

「……『あたしたち魔物』、だと?」

「そう。影も、闇も、みんな魔物なのよ。しらなかつた?」

「ばかな」

「驚くのも無理はないわね。あたしも、生まれる前までは知らなか

つたもの。だつてエルフエの中では、『影』は魔物と違つものね？

そのとおりだ。影とは、エルフエが死んだ後に、魂が正しく循環の輪に戻れなかつた時に生まれるモノであり、生き物だと定義されている魔物とは違つ。

なぜなら、影は“生きとはいひない”。

だがビルケ自身が言つたとおり、魔物といつ存在が全ての命の終着点だとするならば、生きているかどうかは問題ではなく、確かに影は魔物なのだ。

エルフエといつ命の、魂の行き着く場所。

鈴のような声で笑いながら、少女は相も変わらずふわふわと浮いている。そのねつとりとした視線に、吐き気がした。今すぐにでも槍である小さな胸を貫いてやりたい衝動に駆られながら、腹の底から一一杯の強がりと厭味をこめてそれを吐く。

「まるで闇になる前の記憶が残つてゐるような素振りだな」

それを聞いた少女の表情が変わる。

言われて初めて気がついた、とても言つように軽く目を見開き、それからため息と共に悲しげに目を伏せた。

「そうね。きっと、あたしもエルフエだつた。ポツリポツリと記憶は残つてゐるけれど、名前も思い出せないのよ……この姿も記憶も、過去の姿を借りた闇。本物のあたしなんて、どこにも居ない」

ビルケに向けてなのか、はたまた独り言なのかの判断もつかぬほ

ど弱々しい声で咳き、怯えるように自らの体をかき抱ぐ。急に表情を変えた少女の行動に、訝しげに眉をひそめたビルケへ向かって、それでも彼女は『元を』なりに曲げてたずねた。

「ねえ、あたしは何なの？　あたしが知っているのは、黄金王さまの言葉だけ。『憎いならば命を奪え。それが楽しいならばそれもい。寂しいならば仲間を増やせ。お前は自由なのだ。悲しいならば』

「

『ちぢみ葉を区切り、震えながら次を呟く。

「『やのときは、お前を殺せばいい』」

ビルケは田を見開き、絶句した。

耳に届くと同時に強制的に理解した、紛れもないその意味は。

「……お前は、悲しいのか？」

「わからない。何も分からぬの。自分の気持ちなんて、とうの昔に置いて来てしまったもの。闇つてなんなの？　あたしにも分からぬわ。うまれる前の遠い遠い記憶を再生しては、むなしさをただ繰り返して、渦の真ん中で振り回されて、ぐるぐるしてゐただけなよ。そんな存在に、答えなんてあると思つ？」

涙こそない。だが笑う『元』とは裏腹に、少女は表情を壊れてしまいそうなほどゆがめていた。

黄金王とは、世界とはかくも残酷な存在なのか。

ビルケ自身にも、少女のいう「むなしさ」のような経験はある。それでもビルケは生きていたし、新しいめぐり合いもあった。空いた穴を埋めるだけのものが、まだあつたのだ。

ビルケは唐突に、闇のなんたるかを理解した。否、せざるを得な

かつた。田の前で震える華美な少女は、確かに「闇」そのもののなかだ。

ふ、と体が軽くなつた。見れば、縛り付けられていた手と足が開放されている。

「…………？」

「もういいわ。なんだか馬鹿馬鹿しくなつちやつた。どこへなりと行きなさい」

また急に表情を変えて、少女は浮いたままひらひらと手を振った。ビルケはしばし呆然としながら、本当に自分の手足がついているか確認してみる。それから、ゆっくりと立ち上がりて少女のほうを見た。

「…………」

「どうしたの？ 奥に行けば外に出られるし、もう何もしないわ。あなたなら森の声が、モンテンヴァルトに導いてくれるはず」

「それでいいのか？」

言葉尻をさくさくると、少女はぴたりと動きを止めた。

「よくなかつたら解きはしないわよ。あたしは氣まぐれよ。それともまた縛られたいの？」

「いや、縛られるのはごめんだが。……答えを、知りたいとは思わないのか」

「答え、ですって？」

ふん、と鼻を鳴らすと同時に、少女の顔に見下すような田つきが再来する。けれど今はその奥に潜んだものが、手に取るよつにわか

つた。

「そうだ。お前が見つけるものだから私には答えられんが、一人で見つけるのも難しいだろ? 少しならば、お前の“答え”を探すのを手伝つても構わない」

あの目が見下しているのは、ビルケではないのだ。ならばこの哀れな少女に、手を貸してやるのも一興かもしれない。例えそれが、エルフエという存在の根本的な法を破ることになるのだとしても。

「あら、エルフエのくせに撻を破るなんて?」

「ふん。もとより撻破りで追放されてきた身だ。もついちど追放されようじと、今更騒ぐこともあるまい。ミステル様なら、妹をともに追い出さよつた事もないだらうしな」

従つべきは、撻ではなく己の信念。彼女はいつだってそうして生きてきた。自らの意志ではないとはいえ、ふれてしまった眞実を無視して放つておけるほどどの器用さなど、ビルケは持ち合わせていいのだ。

「……仲間と剣を交えることになつても?」

「私を討てぬようでは、お前を討つことなどできはしまー。特に、お前の生前の兄にはな」

「…………」

ビルケのぶつせりほづな言葉の、どこが琴線に触れたのか。少女は今まで見た事もないほど輝いた目で微笑む。

「……わかつたわよ。好きになさー」

放たれた言葉は高慢。だが、嬉しそうに少女は言った。

第十一節 Nebenhörn (霧笛) (前書き)

「うらさ、その岸辺に響かれる波の音は、行く手を導く静かなる笛のよう。

君の微笑にも似たその音は、しかし僕を惑わせるのに十分なだけの旋律でもつて迫るのだ。

「霧の魔笛」
スプラッヒエ・ヴォルト詩集より

第十一節 Nebelhorn (霧笛)

「……ふあ……」

太陽が昇る前に、鳥の声で目を覚ました。昨夜は遅くまで武器の手入れをしていたから、まだ少し眠気が残っている。だが、さすがに今日だけはそんな事も言つていられなかつた。寝床の上で上半身を起し、大きく伸びをする。

昨夜も雪が降つたのである。テントの中とはいえ、晴れた日よりはやや湿つた感じの冷たい空氣が肌を刺し、彼は思わず身震いをした。寝床のぬくもりに未練を残しながらも這い出し、水差しから茶渋のこびり付いたカップに水を注いで、一気に飲み干す。眠つている間に貼りついた喉が潤され、シユネイはふう、とひとつ息を吐いた。

食事も取らず早々に毛皮の外套を着込み、もういちど念入りに武器をチェックする。それから口と矢筒を背負い、その上から旅に必要なものをつめこんだ茶色の背嚢を背負う。腰には革のベルトで剣を止めた。

雪深い森を歩き回るのに慣れた、ややくたびれた風のブーツを履き、やはり毛皮で作られた帽子をかぶる。最後に柔らかい革の手袋をはめて、シユネイはあちらこちらに木屑の散乱したままのテントを出た。

生きて帰つてこられるかもわからない。だが、不思議とそんな事実に対する不安などはなかつた。

今までにすこしづかかり命を削りすぎていて、感覚が麻痺しているのかもしれない。ふとそんな考えが頭に浮かんできて、ショネイは思わず自嘲に口元を釣り上げる。冴え渡る薄闇の中で、青色に染まつた新雪を踏む。「さあ、さあ」というぐもつたまま耳に届く音を聞きながら、ミステルの住まいントの裏手へと向かつた。

そこには巨大な樅の木が一本、奥へ進もうとするものの前に立ちふさがるように生えていた。

ひびだらけの低い岩壁を、抉りながら生えてきたのであるうその根は複雑に絡み合つて垂れ下がり、牙をむく獸の「ごく」自分を見上げるショネイを威嚇している。この樅の大樹が守るのは、モンティンヴァルトの最奥への入り口のひとつであり、ヤーレスタイトの長は代々その門番の役割も兼ねているのだ、といつかガイゲから聞いたことを思い出した。

「おお、来たな」
「お待たせして申し訳ありません」
「なあに、気にするな。年をとると自然と早起きになってしまいだな」

小さな老婆のこりこりと笑う声が、どこかほつとする。無意識のうちに緊張していたのか、と自分でも驚きながら、ショネイは前へ進み出た。

「ゆっくり眠れたか？」
「いえ。正直なところ、あまり眠れませんでした」
「そうかそうか。まあ、お前はそういう所だけは几帳面だからね。わしのような年寄りでは、そんな無茶はできんわい」

そういう所だけ、とかすかな皮肉を込められて、シユネイは思わず少しの苦味を含んだ顔で笑い返す。

しかしミステルは彼の心を知つていて、緊張をほぐそうとしてくれているのだろう。穏やかに微笑みながら、いつものように軽く言葉をかけてきた。

「さて」

と、ミステルは表情を変え、櫻の大樹へと視線を移す。

「ここより先は神々の庭じや。あの影どもの潜む所は我らには分からぬゆえ、ビルケの捕らわれている場所に目星を付けるには、神々の庭の住人に教えを請うしか方法はない。だが、神々の庭は我ら精霊の住まう場所とは何もかもが違う」

よいな？ と疑問系の形を取った静かな声に、シユネイは無言でうなずいた。ミステルもうなずき返し、岩壁のそばまでゆっくりと歩いていく。

それからミステルは雪の上に、杖でなにやら文字のような模様のようない、奇妙な形をしたものをしていくつか書いた。

後ろから見ているシユネイには、一体何を書いているのかは判別できない。

書き終えると、彼女は懷から小さな木製の水筒をとりだし、中から何かの液体を振り掛ける。雪の上に撒かれた雪が濃い赤紫色をしているところから、その液体が山ぶどう酒だと分かった。

「森の賢者、大樹の靈よ。エルフの婆の言葉に耳を傾けておくれ」

ミステルは歌うように言つ。シユネイたちのように実際に歌つた

わけではなく、何かの呪文のよつた調子だ。

やさしく穏やかなその文言が、かすかに吹いた風に乗せて櫻の枝に届く。風に吹かれてか、老婆の言葉に反応してか、櫻の大樹はざわざわと緑の葉のついた枝を鳴らした。

「おまえたちの庭の懷に、もう一度わしの眷属を受け入れておくれ

そう語りかけると、周囲の空気がざわりと震える。背筋が痺れるような感覚が走り、シユネイはおもわず息をのんだ。櫻の木とミステルの言葉に依らない対話が、森の奥への道を開く。

シユネイの耳には、りいん、りいん、と空氣の震えている音が聞こえていた。

よく晴れた日に、森の中をふいに強い風が駆け抜けると、木々や葉を鳴らした風からこんな音がする。ひどく懐かしいが、それでいてかすかに悲しく思えるような風の調べに似た音に、彼は目を細めた。

「うむ。ほれ、シユネイ。あまり待たせては悪いでな、早う行ってやりなさい」

杖の先で櫻の根元の岩壁に道が開かれたことを示し、ミステルはシユネイを振り返った。岩壁は一見、なんの変化もないよう見えれる。が、よく耳を澄ませば彼女が示した位置から、風の鳴る音が聞こえていた。

「……行つてまいります」

前へ進み出で、ミステルの足元に一度ひざまずき、礼を取る。

老婆はその頭に、深く皺の刻まれた指を乗せて、もう片方の手で祝福のまじないの仕草をした。それから彼女は一歩さがり、シュネイが立ち上がるのを待つ。

「たのんだぞ」

立ち上がったシュネイはその言葉にて寧に頭をさげて、風の音の聞こえる岩壁へと手を触れた。

途端、世界の天地がぐるりと逆転する。

いや、逆転したように感じた、といったほうが正しいのか。

頭ごと脳を激しく揺さぶられてこよくな感覚に、シュネイは顔をしかめてうずくまり、目を閉じて頭を抱えた。だが目を閉じたところでは景色は消えず、足は確かに地面についている感触があるので、瞼の裏の視界だけがぐるぐると回って気持ちが悪い。

さつきから相変わらず、りいん、りいんと鳴り続けている風の音が幾重にも重なりあって、だんだん頭が痛くなつて。意識が引き伸ばされ、薄くなつていくのが何故かはつきりと分かる。

いつたい何が起こったのか、彼に理解できる余裕はなかつた。

気付けばいつも通り、厚く雪の積もる森にひとりでいた。

ようやく耳鳴りと頭痛が治まってきて、シユネイはいまだ軽く眉をひそめたままで立ち上がる。辺りを見回すとミステルの姿は既にないが、見慣れた森と特に何ら変わりはないように思えた。うしろを振り返れば通り抜けってきたのであらう岩壁が、木々の根に埋もれて静かにたたずんでいる。

上り始めた太陽の赤い光に照らされてくる、美しい白の森。だがどこか現実感がない、と思いかけてそこどうやく気が付かされる。

時が止まったかのように、ここにはまるで「ゆらぎ」がなかつた。太陽の灯、それを反射して煌くはずの雪、呼吸をした空気の流れ。それにしんとしていて、自分のたてる音以外の音が殆ど聞こえない。

木の葉ひとつ揺れないここが、神の庭と呼ばれるモンテンヴァルトの最奥部なのだろうか。精霊たちのざめきや月ウサギの跳ねる音はどこへ行ってしまったのだろう?

やや呆然としたまま、シユネイは一步を踏み出した。田に映る色彩は白、青、そして紫。いつもの朝と何も変わりはしないのに、命の氣配だけがすっぽりと抜け落ちているような……そんな奇妙な世界。

想像していたものとはまるで異なる「神々の庭」の様子に戸惑いを覚えながら、シユネイはあてもなく歩を進める。

「やあやあ。またお客さんかい？」

「くすくす。珍しいわねえ」

と、不意に後ろから声がした。思わずぎょっとして、反射的に腰の剣を抜き放ちながら後ろを振り向く。

するとそこにいたのは、緑の服と緑の帽子の奇妙な二人組。片方

は男で、片方は女だ。

「やあやあ、ずいぶん困惑しているみたいだね」

「ぐすくす、それはそうですね、ここはエルフの森とは違つもの」

後をつけられていたのだろうか？

微塵の気配も感じなかつたことに驚きながらも、シュネイは彼らを睨みつける。

が、まるで心を読まれたかのように困惑を見透かされて、狼狽したのが顔に出てしまつたのだろう。女のほうが、持つていた短い傘で剣にこつこつと触れる。

「ぐすくす。初めてじゃあ、驚くのも無理ないですわね。ちゃんと説明してあげますから、まずはその物騒なものを收めなさいな」

女の傘に触れられると、不思議なことに、ふ、と剣を支えていた腕の力が抜けてしまった。そのままさして力も込もつていないのであらう傘に押しやられ、なんだか動けないまま剣を下ろす。

「あの――」

「やあやあ、申し遅れたね。僕らはステッヒュバルメ」

「ぐすくす。そうですわね、この森のとある樹木の靈の長、とでも言えばここのかしらねえ」

「…………」

問いかけようとしたことを先に答えられて、ぐ、と言葉を飲み込んだ。どうも聞こえたことや、やれうとしたことを先回りされているらしい。ミステルが「心を読む」ので、行動を先回りされること自体には慣れているが、彼らの場合はそれがあからさま過ぎて気持ちが悪い。

「やあやあ。気持ちが悪いとは心外だねい。仮にも神靈に向かつて

サ」

「ぐすくす。仕方ありませんわよ、彼はこの庭が初めてなんでもの」

やはり彼らも、相手の心を読むのか。言葉には出していないはずの思考を悟られて、確信する。

そこでシュネイはようやく息をついて、剣を鞘に納めながら改めて彼らの姿をまじまじと見た。雪の上ではなんとも鮮やかに目立つ、緑の服に緑の帽子。端々を少しずつ破いたような、一定しないとげとした縁のラインをもつた、奇妙な服だ。

全体としては一人とも、人間の「貴族」と呼ばれる一族の服装に似ている気がする。男のほうはループタイの飾りと短いステッキのもち手に、女のほうは帽子とネットドレスに、それぞれ赤い色の石があしらわれていた。

顔は互いに良く似ている。女のほうがやや睫が長いくらいか。顔に描かれた模様と服装の違いから、だいぶ異なる印象を受けはするが、よくよく眺めると双子のようになぞつくりだ。

神靈だと名乗つたが、ステルンよりやや年下のように見える容姿のために、どうも胡散臭く見える。

……いや、本来は妖精や精靈といわれる類のモノの外見が、年齢に左右されるような事はほとんどないのである。重ねた齡どおりに外見を変えていく、エルフのほうが珍しいのは分かつていた。

そう、分かつてはいたが、どうもエルフと似たような、妙に質感のある姿で目の前に出てこられたと調子が狂う。

「神靈様とは知らずとんでもない」無礼を。どうかお許しください

しかし神靈だと言われたからには、彼らより低位の精靈であるエルフエが頭を下げるわけにはいかない。ゆっくりとひざまづき、左の拳を右の掌で包み込んで祈るような、エルフH式の礼をとる。

「くすくす。今更そんなに改まらなくてもいいのにねえ？」

「やあやあ、こっちこそ調子が狂うねい。……ま、急に出てきて神靈だなんて、胡散臭いのはわかるけどサ。あっち側の門番がアイヘルなら、こっち側の門番が僕らステッヒエパルメってところかな」「アイヘル……？」

聞き覚えのない名に首をかしげる。すると男のほづが、苦笑しながらステッキを宙でくるくると振り回した。

「やあやあ、思い当たらないかな。君も見たはずだよ。ミステルが声をかけていたろう？」

「くすくす、大きな樺の木の靈ですわ。岩壁のむこう側に生えていた」

ああ、なるほど、とショネイはうなずく。ミステルが話しかけていたあの大樺のことか。

すると自然に、彼らの語ったふたつの名前が、一つの法則に従っていることにも気付かれる。彼らのこつている樹靈の呼び名は、エルフエの個人名と同じく精靈時代の言葉なのだろう。ずいぶん昔に習つた覚えのある、古い言葉で歌う曲を思い返して、ショネイは納得した。

といつことは、彼らは。

「ではあなた方ステッヒエパルメといつのは、柊の神靈なのですね」

シユネイが確信をもつてそういうと、田の前の一人は一瞬きょとんとしてシユネイを見つめたあと、顔を見合させてさざめくようこ笑った。

「やあやあ、まさか当たられるとは思わなかつたねい」

「くすくす、さすがは古き神の血を引く一族つてところかしら」

「…………」

「いちじちじちじの言葉を荼化されるので、少し疲れてきた。軽くため息混じりの息を吐ぐ。

そうだった。本来、植物に宿る精霊というものは子供っぽく、自由奔放な性格をしているものがほとんどだつた。冬になると大抵の精霊がなりを潜めてしまつので忘れていたが。

思わず眉をしかめかけて、慌てて表情を保つ。心を読む彼らにそんなごまかしは効かないだろうが、と思いながらもこめかみを揉みほぐしたい衝動をこらえた。静かに、彼らの次の言葉を待つてみる。

「やあやあ、いつまでも本題に入らないのは悪かつたよ」

帽子をステッキで軽く叩いて、男の方がシユネイに謝罪する。どう返していいものか考えあぐねているうちに、女の方が鮮やかな口紅をつけた唇を相変わらず吊りあげたままで、口を開いた。

「では説明して差し上げますわ。私たち門番の役目は、この庭に侵入したものの見定めを行うこと

「この神々の庭というのは、過ぎ去つた時代の環境を残した……時の狭間に忘れ去られた場所でね」

表情は笑みを貼り付けたままなのであまり変わりはしないが、先

ほどまでの人を小馬鹿にしたような言葉遣いを一変し、一人は説明を始める。

「そうねえ、あなたたちの言葉で言えば“精霊時代”の環境をそのまま残した場所、という事になるのかしらね？」

「そうだね。けれどこの時から忘れ去られた場所に、現の時を刻むものたちがあまり無闇にやってくると、その秩序が壊されてしまう。だから僕らのような樹木の靈……つまり、時の流れにあまり影響されない性格をもつた精霊が、その門番を務めているんだ！」

精霊時代。それは全てのものが完全なる無を知ることなく、いたるところに精霊たちの闊歩していた時代のことだ。その頃は誰もが精霊と言葉を交わすことができ、神々もいまだ地上に君臨していた黄金の時代だつたという。人間の死者の魂からエルフエが形作られていた、という話もその時代の伝説、ひとつのお話だ。

「ではこの場合はおれが、“現の時を刻むもの”なのです。そしてここには、時の止まつた場所であると？」

「んん……その表現はちょっと正確さに欠けるね」

「季節の流れは外側と同じ、繋がつてはいるの。月の森に雪が降る時期には、庭にも雪が降るけれど……この雪は冬の間中、いつさい融けることはないのよ」

なんだかややこしい話になってきた。シュネイは彼らの話を理解しようと懸命に頭を働かせていたが、どうにもその言葉だけでは理解しがたい。

きっと自分の感覚がブランドたちに理解されないと似たようなものなのだろう、と考えることにした。心の声を聞いたのか、ステッヒエパルメがやや眉尻を下げる、困ったように首をかしげる。

「……まあ、これも仕方ないですね。ずいぶん頭の回転が速いみたいだから、もしかしたらと思いましたけれど……やはりこの庭のことを理解できる輩がそういうのも思えませんわ」

「だねい。ま、僕らの同胞でも、正確に理解してるのは少ないわけだし」

ため息混じりに吐かれた言葉がすこし悔しくて、シュネイは彼らに対して自分なりの解釈を伝えてみる。

「ええと……この場所は、あの壁の向こう側とは季節だけが繋がっている。似てはいても違う時間の流れに属しているから、そこにおれのような異なる時間を無闇にもちこむと、その場所としての理が乱れるおそれがある。だからあなた方が審査する、と」

「え？」「え？」

ぱつ、とフリルのついた日傘を開き、これ以上は教えても無駄だと愚ったのか、女の方が感情を消した顔でにこりと笑う。雪を背景に背負いながらの日傘とは、これも奇妙な光景だ。

「というわけで審査は終了。キミはどうやら本物の神の血族らしいねい？ いや、なかなか面白い」

「え？」

シュネイは田を点にして一人を見つめた。いつの間に審査などしていたのだろう。精霊の審査だというから、一体どんな難題を出されるのかと身構えていたのだが。

「私たちがみるのは侵入者の“ヒーラ”ですわ。エルフのミステルと似ている、かしらね。改めて神々の庭へようこそ、シュネイ」

「……あの、ええと」

「その疑問に説明するのはいちいちきりがなくて面倒だからね。ただの手続きだからあまり気にしないよ。どうもキミは眞面目すぎるから」があるようだ

「うひー、ヒシュネイの頭の側面をステッキの先で軽く叩く縁の男。

思いがけない指摘をされて硬直していると、彼は無邪気な笑みを浮かべて、ステッキを引いた。それからその腕をシュネイからみて右手へと向け、ステッキの先をぐるぐると回して何かを示す。

「今朝は先客がいてね。キミが来る前に滞在許可を出した。彼らはあっちに向かつていったから、良かつたら行つてみるといい」

男が言い終えるか終えないかのうちに、女が困った顔でちょうど男の服の裾を引っ張る。

「ぐすくす、大事なことを伝え忘れてますわよ」

「やあやあ、これはうつかりしていたね。この庭では、外の世界の常識は通じない。それと、キミたちが生きるのに最低限必要なもの以外を殺してはならないよ。あとは……そうそう。冬には決して水を川や泉からとつて飲んではならない。かならず天に住まう神々からの賜り物だけを使うんだ」

口調とは裏腹に厳肅な顔で語りかけられたので、シュネイも思わず神妙な面持ちになつてうなずいた。すると一人はふ、と柔らかな表情になり、まるで夢であったかのように……空氣の中へと溶けるように消えてしまった。

残つたのはまぎれもない彼らの足跡と、しんとして時の氣配のない、この場所の奇妙な感覚だけ。

ショネイはしばし呆然と立ち尽くしていたが、よくよく耳をすませてみれば、はるか遠くに人の話し声をわずかに聞き取ることができた。

なぜかどこかで聞き覚えのあるような音の群れに、ショネイは思わず口元を緩め、安堵する。それからその音を追しするべにして、ステッヒエパルメの示した方へと歩き始めた。

時間を忘れたからなのか、まるで新しい柔らかな雪を踏む音が、濃い緑の木々の間にこだましていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5887i/>

Sternklare Nacht

2010年10月11日18時09分発行